

第26回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21726>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 26, 2002-03-25. 九州大学大学教育研究センター
バージョン：
権利関係：



●学生フォーラム



<学生フォーラムのスケジュール>

- 概要説明（15分：13：00～13：15）
会場：大研修室
- 班別会議会場への移動と準備（5分：13：15～13：20）
会場：1班（研修室1），2班（研修室2），3班（研修室3），4班（研修室4）
- 班別会議（100分：13：20～15：00）
議事：
 - （1）開会
 - （2）自己紹介（名前と所属大学だけ）
 - （3）各大学におけるレポート報告（各大学2～3分程度）
 - （4）自由討議
 - （5）閉会
- 移動及び休憩（30分：15：00～15：30）
 - （1）全体会議会場（大研修室）への移動
 - （2）休憩
- 全体会議（90分：15：30～17：00）
会場：大研修室
議事：
 - （1）開会
 - （2）班別会議の報告（討議の要約，各班5分程度）
 - （3）総合討議「循環・共生のライフスタイルとは」
 - （4）閉会

学生フォーラム班別組分け

1 班

大学名	氏名	性別
福岡教育大学	石橋 千賀	女
九州大学	林 民和	男
	原田 祐希	男
	見戸 順一	男
九州芸術工科大学	青木 匠	男
九州工業大学	安藤 光	男
佐賀大学	田上 安宣	男
	一木 聖子	女
	田口 修治	男
長崎大学	中野 祐介	男
	中村 祐介	男
大分大学	金田 典子	女
	荒木 真由美	女
熊本大学	野副 雅也	男
	西田 敏秀	男
宮崎大学	吉鶴 大樹	男
鹿児島大学	河野 百合子	女
	鳥越 美千代	女
	宮城 望	女
鹿屋体育大学	平川 慎二	男
琉球大学	大橋 伸正	男
	知念 直也	男
	池田 英之	男

3 班

大学名	氏名	性別
福岡教育大学	坂本 真美	女
九州大学	橋本 真一	男
	林 健太郎	男
	市田 康弘	男
九州芸術工科大学	上野 裕貴	男
九州工業大学	山口 陽子	女
	小山 和彦	男
佐賀大学	酒井 英雄	男
	藤原 優子	女
長崎大学	真弓 雄一郎	男
	佐藤 聖子	女
大分大学	砂川 忠和	男
	岡田 直美	女
熊本大学	吉原 明子	女
	大嶋 俊範	男
宮崎大学	河野 亜希子	女
	椎葉 安信	男
鹿児島大学	久米田 晃子	女
	肥後 佳織	女
鹿屋体育大学	大澤 拓也	男
	駒澤 孝美	男
琉球大学	金城 桂一郎	男
	大野 飛鳥	女

2 班

大学名	氏名	性別
福岡教育大学	村上 智美	女
九州大学	江崎 みお	女
	松林 高紀	男
	外村 拓也	男
九州芸術工科大学	稲葉 久美子	女
九州工業大学	志岐 光	男
佐賀大学	阪東 靖記	男
	新ヶ江 梨恵	女
長崎大学	田中 公一朗	男
	山口 智美	女
大分大学	元村 麻衣子	女
	大森 美枝子	女
熊本大学	村上 洋平	男
	江島 恵美子	女
	平川 恵美	女
宮崎大学	廣田 恵美	女
鹿児島大学	齋藤 伸枝	女
	橋口 千琴	女
	余 捷	女
鹿屋体育大学	柏 伸吾	男
	柏木 芙美	女
琉球大学	上田 里実	女
	前川 有基	男

4 班

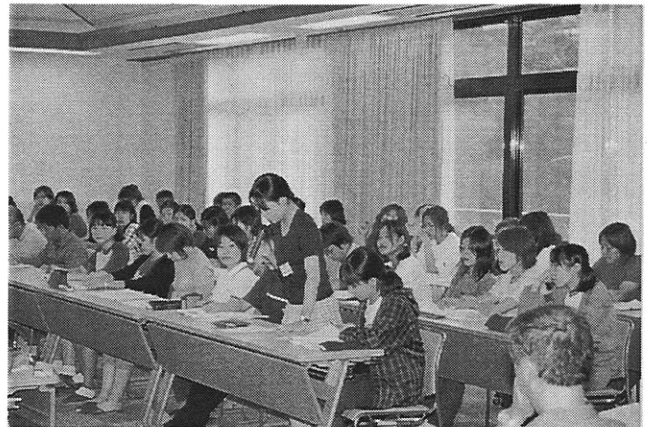
大学名	氏名	性別
福岡教育大学	山内 美知子	女
九州大学	中島 直哉	男
	小林 千恵	女
	安島 英孝	男
九州工業大学	青木 伸朗	男
	宮崎 寛大	男
佐賀大学	佐藤 奈々絵	女
	猪口 芙紀	女
長崎大学	清水 耕平	男
	中野 心介	男
大分大学	原田 謙三	男
	中島 羊侑子	女
熊本大学	高野 愛子	女
	田中 章子	女
宮崎大学	中島 千晶	女
	松下 彰浩	男
鹿児島大学	武田 由美子	女
	竹之内 綾	女
鹿屋体育大学	荒木 就平	男
	小嶋 純史	男
琉球大学	石田 なお子	女
	比嘉 わかな	女

<福岡教育大学>

「共生」の意味を人間対自然や環境問題として考えた場合、身近なところではゴミ問題やエネルギー問題などが挙げられる。ゴミ問題は製品の大量生産、低価格化が深く関係しているが、増加し続けるゴミの量とその収集や最終処分といった問題が顕在化している。現在、これに対応するために各市町村では、分別収集によるゴミの資源化と再生品化(?)を行っているが、社会全体のシステムが未整備なために、十分機能しているとは言えないと思う。そこで、私たちにできることを考えると、リサイクル社会実現のために、リサイクル運動への協力とグリーン購入が重要だと考えられる。また、私たちが生活する上で最も必要不可欠なエネルギーについて考えてみる。このエネルギーの大部分は化石燃料の使用による。化石燃料は燃焼により二酸化炭素、硫黄酸化物や窒素酸化物を排出するが、それらは温暖化や大気汚染を引き起こしたり、それによる酸性雨等により環境破壊、ひいては健康に害を及ぼしてしまう。例えば、現在私達が当たり前のようにして乗っている車も便利さの裏には排気ガスを排出し、地球温暖化を引き起こすという負の影響がある。また、日本では発電の約6割が燃焼によっていることは忘れてはならないと思う。

20世紀の華々しい科学技術の進歩の裏側には、負の歪みの部分があることを見落としてはならない。

日常の食生活において頻繁に使う油やそれによる汚れを洗う合成洗剤も大変便利なものであるが、排水口に流せば、海洋汚染の原因となるばかりか、下水処理の負担増によりエネルギー消費の増大を招く。即ち、合成洗剤等はとても便利な物であるが、便利さを追求すると環境破壊につながりやすいと言える。しかし、私たちが知らず知らずに行っている自然破壊もちょっとした手間や工夫で改善できる。例えば、洗剤を使わなくても汚れを落とすアクリルたわしを用いたり、油は古新聞にしみこませて捨てるなどである。



現在、物のあふれる豊かな生活の中で過ごしている私たちは、欲しい物はお金を出したらすぐ手に入る。そんな生活の中で、自分の手元にある製品がどのような過程を経てそこに存在するのかということは余り意識していない。手元にある製品がどれだけの資源を有し、使用後はどうなるかということまで考えて、物を消費していかなければならないのではないだろうか(LCA的な考え方が必要である)。

それを実際、研究している国の一つにフランスがあげられる。100kgの石油から1リットルのプラスチックボトルが1,000本製造できるのに対して、同じ量のガラスボトルを作るのに230kgの石油が必要になると試算し、更に製品の輸送段階でもプラスチックボトルは39パーセントの石油燃料を節約できるのだ。

後生にもこの自然あふれる地球を残していくために、今私達は自然や世界の人類に目を向けていかねばならない。そして(教師を目指す)私達が、地球と人間との関係を学び、子ども達にも伝えていかなければならない。「共に生きる」ということは当たり前のことだけれど、実はそれが非常に大切なことだということを実感し、子ども達に伝えていければと思う。

<九州大学>

『大学キャンパスの共生と循環』

共生と循環を考慮した対策を立てることが社会的責任として求められるようになってきた。では、この社会的責任は誰に求められているのだろうか。企業であろうか。例えば、自動車を取りあげると、物理特性を向上させるためのセラミックス、アルミ合金、プラスチック、特殊ゴムなど、再利用をめぐる数多くの課題が見出される。もちろん、有害排気ガス低減の課題もある。これらの課題を解決するには、さらなる科学・技術の進歩が必要であるが、それを担うのは、近い将来の私達に他ならない。

今、企業や行政の担い手となる準備をしている学生として、身近な大学キャンパスを見渡すと、共生と循環の課題への取り組みが、広がりつつあることに気づいた。例えば、学生食堂の弁当箱は他のゴミと別に集め、業者にひきとられ、新しい弁当箱として再生されている。わり箸も、他の業者によってチップにされた後、圧縮材、牛、豚などの家畜の敷き藁や堆肥材料として利用されている。また、米は無洗米を使うことで、水の無駄遣いを避けているだけでなく、とぎ汁に含まれる窒素、リンなどプランクトンの大量発生の原因となる物質を排出しないように留意されている。なお、生ゴミを微生物を利用して処理する試みは、その時に発生する悪臭のために実用化されていないとのことである。

では、共生と循環の課題へ現実的に組んでいる業者努力の恩恵を受けている九州大学は、自然を取り崩して新しい街をつくることになるキャンパス移転をどのように捉えているのだろうか。九州大学のキャンパス移転の基本理念には『循環共生型ユニバーシティ・パークの創造』が謳われ、『キャンパスは、大学としての象徴性に富む景観を持つと共に、周辺環境との調和を図り、環境保全、省エネルギー、資源リサイクル等を配慮する。』と記されている。キャンパスの緑地には、周辺地域に対する飲料などの生活用水（井戸水）の確保を目的とした水源涵養林の機能がある。



他にも緩衝機能、防災機能を持たせ、その中に樹木見本園、標本園、モデル林、植物園、生物群集、生態研究林などを設けて、研究への寄与も計画されている。キャンパス造成においては、エリア内に発見された遺跡群を自然緑地として残し、森林率を敷地面積の25%以上に保ち、大原川とその湧水源には灌漑用水不足などを考慮し手を加えず、「生物多様性保全ゾーン」として貴重な生物を移し、風力発電など自然エネルギーの活用などを取り入れることにより、糸島地域の悠久の歴史と自然との共生を図ろうとしているとのことである。

ネット上で公開されている調査資料によると、移転には問題がないように書かれている。しかし、自然に対して人為的な手が加えられるからには、共生と循環の観点からすると必ず問題が生じるはずである。移転による問題をテーマとした授業も少人数教育科目として開講されているが、学生がモニター役として提言する場がより充実してこそ、新キャンパスは学生を主人公にした学びの場になるにちがいない。

キャンパス移転に伴う、私達の大きな気がかりの一つが、自動車による排気ガスの問題である。すべての施設が移転するわけではないが、学生と教職員を合わせて約2万人の大学が移転すると、それに見合った機能をもつ街が出現する。そこへのアクセスは、JRや地下鉄だけでまかなえるわけではない。人と物資の循環の大半は、自動車に依存せざるをえない。排気ガス対策として規制や補助金制度を設ける方法もあるだろうが、行政や司法を頼みにした打開策は、一時しのぎにすぎず、21世紀の社会にそぐわないと思える。移転によって解決しようとするのでなく、今からでも学生が主体的に取り組める共生と循環の推進もある。例えば、学生間で書籍や家具や家電製品が循環させる「リサイクル・ブース」のようなシステムをつくるなら、共生にもつながる。しかし、これを学生間の売買システムと見なすと、古本屋や中古品屋の店主を学生がやるだけのことになる。「リサイクル・ブース」が互いに顔を合わせて行われる情報交換の場となるなら、学部・学科やサークル仲間を超えたコミュニケーションの輪ができるにちがいない。共生と循環に取り組むにあたって、単なる公開情報の検索でなく、それぞれが実際に積み重ねた体験をめぐるコミュニケーションによる智恵の共生と循環が重要だと考える。

<九州芸術工科大学>

われわれが生活している現代の社会では科学の技術の進歩にともなって、さまざまな問題が出てきています。もちろんわれわれが便利さというおいしいようなものに手を出しているのだから、それに対する見返りがあっても仕方がないと思いますが。それらの多々ある問題の中でも近年特に注目されるようになったのはゴミ問題です。企業から出るゴミ、家庭から出るゴミ、今までは何のためらいもなくゴミをゴミとして捨てていました。しかしゴミ問題が注目されるにつれて特に家庭から出るゴミは少しずつ減ってきています。われわれ一人一人がゴミをどうにか減らしていこうという考えを持つようになったからです。そういう考えの中から生まれた言葉が「リサイクル」です。

少し前までは、大量消費、大量廃棄がさも豊かさを表しているかのように勘違いをしていた人たちが大勢いました。ここ最近でも、新製品に飛びついてそれまで使っていた物をゴミとしている人も多いと思います。そのため、家庭から出る粗大ゴミの量は半端な量ではありませんでした。しかし、今はリサイクルについて公的な事業までもが取り組むようになりました。

最近の代表的な例としては生活環境の保全と経済の健全な発展を目的に、家電リサイクル法(特定家庭用機器再商品化法)が平成 13 年 4 月 1 日から施行されたことが挙げられます。これは家電製品の処理の方法やリサイクルの過程を定めたものです。この家電リサイクル法のしくみとは次のようなものです。

使わなくなった家電製品をちゃんとリサイクルできるように消費者が家電小売店などに引き渡します。収集や再商品化等のために料金を払わなければなりません。こうすることでリサイクル社会に貢献することになります。われわれからのリサイクル費用は収集・運搬とリサイクルのための費用として大切に活用されます。対象家電製品は収集され、家電メーカーに引き渡されます。家電小売店が、以前に販売した対象家電製品や、新しく対象家電製品を買った消費者からそれまで使っていた同じ種類の対象家電製品の引き取りを行います。引き取った対象家電製品は、中古品として再利用する場合はのぞいて、その対象家電製品をつくった家電メーカーなどに引き渡され、無駄にならないようにきちんと再商品化(再資源化)されます。廃棄される家電製品(特定家庭用機器)の適正な処理と、そこから生まれる資源の有効な利用をはかるため、製品をつくったメーカーや販売した小売店と一緒にわれわれみんなが協力して、未来のためにクリーンなリサイクル社会を築いていこうというシステムです。以上が家電リサイクル法のおおまかな説明です。このようにしてリサイクルはどんどん進歩しています。

しかし、どんなに法律を整えて、業者ががんばってごみを回収しても、消費者が法律を理解し、きちんとリサイクルのために協力してくれなければ話になりません。リサイクル社会とは、われわれ一人一人が資源のことを考えて協力して、初めて成り立つものではないでしょうか。

では、実際に今大学生で一人暮らしをしている自分たちがどのくらいリサイクルに協力しているかを見てみましょう。まず、福岡市ではごみを「燃えるごみ」「不燃物(かん)」「不燃物(びん・ペットボトル)」に分けています。きちんと分別して捨てようとは思っていますが、ごみ袋を切らしてしまって、たまにペットボトルも燃えるごみで捨ててしまったりするのが現状です。また、紙ごみを全部燃えるごみで捨ててしまっていて、古紙回収などに協力していません。牛乳パックもプラスチックトレイもスーパーマーケットなどでリサイクルのために回収していますが、よく燃えるごみで捨ててしまいがちです。これからの社会をになう私たちがこんなに非協力的ではリサイクル社会が成り立ちません。

私たちがちょっと生活を見直すだけで、もっと地球にやさしい社会になるのではないのでしょうか。合宿共同授業で他大学の人たちと話し合う前に、自分の生活を資源の面で見直して、もっとリサイクルについて考えていきたいと思えます。

<九州工業大学>

『R R R . K i t a k y u s y u ～循環型社会の構築に向けて～』

工業都市として4大工業地帯の一角を占めてきた北九州市。しかし、今、北九州と聞いて如何なるイメージが浮かび上がるだろうか？恐らくあなたのイメージを裏切って北九州市は、世界で有数の環境産業都市エコタウンへと変貌を遂げている。

生産一辺倒の工業都市であった北九州市は、その主力である鉄鋼業が価格競争に敗れ衰退の道を歩みつつあった。しかし、それでも集まってくる生産に携わる余剰な技術者たち、そして数年来活動が盛んであった北九州市の環境への取り組みが融合し新たな産業を創出した。それが北九州市のエコタウン事業である。

北九州エコタウン事業の三本の柱として、ペットボトルや家電製品等のリサイクル工場が操業している「総合環境コンビナート」、中小・ベンチャー企業が集合する「響リサイクル団地」、また、最終処分場の管理技術や償却廃棄物の無害化リサイクル等が進められている「実証研究センター」が挙げられる。

総合環境コンビナート内には、日本最大設備を誇る「西日本ペットボトルリサイクル」という企業の動きが顕著である。近年に施行された容器包装リサイクル法により、市町村が回収したペットボトルを再生するのがこの企業の役割である。PETと呼ばれる原料樹脂の用途は繊維やフィルムなど多様であり、ボトルだけに使われてはいない。しかし、ペットボトルは、分別収集力比較的容易で再生品としての再利用が可能な貴重な資源である。再生PET樹脂の生産には、高度な品質管理が要求されるがその点に関してこの企業は自信があるようだ。しかし、現実には再生品の供給は良いが販売が追いついてない。利益が求められる企業にとって頭が痛いところである。

同じように使い捨てのプラスチックに関しては、実証研究センター内で我が大学の「生ごみで生分解性プラスチックを作る研究棟」が建設されている。プラスチックの原料である乳酸を生ごみから取り出して、生産にかかる膨大なエネルギーをエコタウン内のごみ焼却エネルギーから得ることで、価格面でも既存の勢力に十分太刀打ちできるのではないかと考えている。また、ごみ処理で発生する熱は、再生産のエネルギーに利用されるだけでなく、スーパーごみ発電施設を介して電力という形で社会へ返されている。北九州では現在3万6千kwの発電が可能である。全国的にも建設が盛んで、2010年をめぐりに400万kwの発電を目指している。ごみから得られるエネルギーには計り知れないものがある。



市側は、条例として、将来の都市構想に大きく循環型社会を盛り込んだアジェンダ21、特にごみ問題から循環型社会を築いていくための一般廃棄物処理基本計画等を定めることでこれらの企業を積極的に後押ししている。世界に先駆けた循環型社会の実現化へ向け、こういった企業や行政の動きで外堀は完成しつつある。しかし、上からのゴリ押しだけではシステムが稼動しない。研究地区の建設に際し、住民に対して緑を残すと言って建設の了承を得たのにも

かわらず、工事が始まると不要なところまで木を切り倒し、住民から反感を買ってしまった。そんなことで住民からの信用をなくしたのではせっかくの壮大な都市構想も絵に描いた餅である。住民の積極的なエコタウン事業への参加を求めるなら、市のほうは慎重に住民の声を取り入れていく必要がある。正直なところ北九州市では、循環型社会を形成していく上で最も重要な住民の協力が得られていないのだ。しかしながら、画期的な目標を掲げる北九州市の取り組みが日本全国に衝撃を与えているのは揺るぎない事実である。市と住民とが互いに歩み寄り、21世紀リサイクルのメッカとして北九州市はさらなる飛躍を目指す。

<佐賀大学>

今、我々の住む社会はモノで溢れている。昔はモノが希少であったため、モノが人よりもむしろ大切にされていた時代であったが、人々が生活の便利さを求めて技術革新を行った結果、今では逆に人がモノよりも尊重される時代となっている。これこそが現代の大量生産・大量消費の社会であり、我々は今、このような環境に高負荷なもののみを与えていく社会を、如何にして低負荷なものを与えていく社会に変革していかなければならないかについて議論しなければならない。

このことについて、我々は Recycle を行うことが環境にとって低負荷になるであろうと考えた。ただ、Recycle というものはただそれのみで為されるのではなく、Refuse → Reduce → Reuse → Recycle という段階を経なければならない。即ち、Recycle は最終手段として為されなければならない。このことを更に進めて我々が議論を行った結果、Recycle を行う前段階として、むしろ Reduce の方が我々のライフスタイルには取り入れることが容易であろうという結論に達した。故に、我々は今回の題目である「循環・共生型のライフスタイル」を考察するにあたって、この Reduce に着目して議論を行う。

ここで我々が目をつけたのは、ドイツの環境に対する姿勢だ。流石に「環境先進国」とも言われる国だけあって、環境問題に対する取り組みは、日本のそれとは格段に違う。そこで、そのドイツの取り組みについて着目することにする。

まず、ドイツの家庭ゴミの構成廃棄物は、有価物、有機物(生ゴミ等)、有害物質、有害物質に汚染された製品というように分類される。ドイツでは、投入すべきゴミが明確に決まっている。その中の容器包装廃棄物の分別を徹底するために、DSD なる容器包装廃棄物回収の会社があり、DSD 回収対象製品には分別回収されることを示すために、「緑の点」というマークをつける。このマークは容器包装会社がライセンスとして購入する。そして、使用物質に応じた料金が加算されている。故に結果的に消費者が処理費用を支払っていることになる。換言すれば、日本のように廃棄する時に消費者が処理費用を支払うのではなく、購入時に既に支払っているのである。DSD と同じくして設立されたのが DKR で、DKR は DSD からプラスチック類を一手に引き受け再処理をしプレスして、契約したメーカーに送られ製品化される。また、微小な容器包装材まで回収し、できるだけ Recycle しようというコンセプトで開発された「カタクス」という全自動式のパイロットプラントができ、現在それを実証レベルまで高めた工場が「ソーテック 3」という名で起動している。そして、ドイツでは生ゴミも有価物として分類されるために、有価物を一手に引き受けると膨大な施設になるため、Dualer System という別枠の廃棄ルートを作り・消費者には有装材という分別を行っている。この回収の成果によって販売包装材の消費量は徐々に削減され、また DSD により Recycle された包装材の量は増加している。ドイツの最終廃棄物の中には DSD 対象となる物や有機質等が含まれていて、有機質の直接的な埋め立て処理に伴う発生ガスのハントリングや浸出水管理ならびに埋立地自体の安定性等を目的とし、MBA という処理法が生まれた。現在ドイツでは、MBA を MBE、MBS という 2 種類に分類して 2005 年から導入しようと試みている。

さて、これまでドイツの環境問題に対する取り組みに着目してきたわけだが、上記の事柄を推進するために、ドイツには強力な法体制が敷かれている。また、埋立地に関する技術書なるものまで出ている。我々がドイツに見習うならば、まずは強力な後ろ楯となる法律を制定させなければならない。そのうえで、消費者からも企業からも、環境問題に対してベクトルを向けなければならない。そこで初めて「循環・共生型のライフスタイル」というものが確立されるであろう。尚、我々がドイツを本気で見習うのであれば、我が国の多少の経済的損失はやむを得ない事を付記しておく。



注釈:

1. DSD … Duales System Deutschland の略

利益を求める会社ではなく、ドイツ全土で使用されている殆どの容器包装廃棄物に対し、分別収集から Recycling まで、責任を持って組織運営している会社

2. DKR … Deutsche Gesellschaft fuer Kunststoff Recycling mbH の略

ドイツ・プラスチック・リサイクリング有限会社

3. MBA … Mechanisch-Biologische Abfallbehandlung の略

機械的・生物的廃棄物処理の意味。この処理では、最終廃棄物に含有される物質が有価物として Recycle 対象と成り得る金属類やガラスといった無機質、微生物によって分解可能な生ゴミ類を主体とした有機質に二分されることに注目して、前者を主に機械選別によって回収除去し、後者は適切な反応槽にて微生物による消化あるいは醗酵作用によって分解を行うというシステム。

4. MBE … Mechanisch-Biologische Endrotte の略

機械的・生物的完全消化法の意味。有機物質に含まれる炭素を廃棄物と見なし、結合を生物の力を借りて切りながら、最終的に処理するもの。

5. MBS … Mechanisch-Biologische Stabilisierung の略

機械的・生物的安定化法の意味。有機物質に含まれる炭素結合をできるだけ保持しながら燃料としての Recycling を目的としたもの。

参考文献: Daten zur Umwelt, Umweltbundesamt. 1997.

<長崎大学>

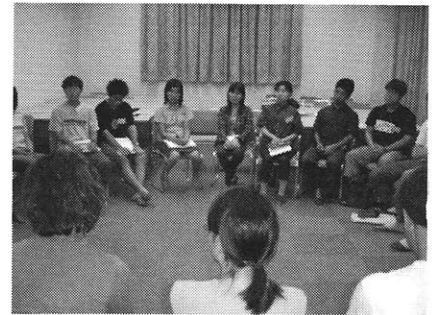
近年、市民レベルで環境問題について考える機会が多くなってきている。その度に、魔法の呪文のように「循環・共生型社会」と言われているが、具体的な対策はあまり実行されていない。それでは、これから私たちが「循環・共生型社会」を創っていくにはどうすればいいのだろうか。

長崎大学は身近なごみ問題を足がかりにし、その解決策について考えていくことにした。日本の多くの地域には循環型社会への流れができていない。私たちは、この原因を市民・行政・企業の環境への意識の低さであると考えている。ここで、ゴミ問題において、ドイツ・名古屋の二つの例を挙げる。ドイツでは、埋め立て処分場が不足し、ごみ問題について、窮地に陥っていた。その結果、市民・行政が一体となり、今やゴミ処理先進地域となっている。名古屋も同様の問題を抱えていた。そうして、市民・行政が一体となり、今やゴミ処理先進国となっている。いずれの例も、市民・行政が危機感を持ったことをきっかけに動き出したことを示している。

一方で、私たちの住んでいる長崎ではゴミ問題について特に迫られたものを感じることはない。ゴミは、家から出た瞬間に別の世界の話となっているのが現状だ。これはほとんどの日本人に当てはまることで、日本社会全体の危機感のなさは、環境問題の解決を大きく妨げているのではないだろうか。

ゴミ問題をはじめとする環境問題の解決、すなわち「循環・共生型社会」の達成のためには、まず、市民一人ひとりが環境に対する危機感を持つことが大切である。

ではどうすれば多くの市民に環境問題に対し危機感をもつことができるのだろうか。最も大切なことは『教育』、つまり市民自身が環境について学ぶこと、それによって、まずは環境問題を自分たちの問題、と認識することである。そうすれば、おのずと危機感を持つはずだ。具体的な手法として、定期的な市民会議・学校現場への『環境』科目の導入・メディアを通じて広告・環境に対する情報の公開、等が挙げられる。とりわけ、学校現場の中に『環境』という科目を導入することが実現すれば、大きな力となりうるだろう。



ところが、危機感を認識するための対策が効果を発揮するには、長い時間が必要である。迫られた課題を含む環境問題への対策には、即効性を持つ別のシステムが必要となってくる。そこで、私たちが考えるのは、今の経済社会の利益優先の考え方を逆手に取り、環境の保護と金銭的な損得を結びつけたシステムを構築、確立させることである。これが実現すれば、企業や個人は環境に配慮した行動をとっていかないと損をすることになる。この、経済に対立するのではなく、密接な関わりをもつ環境保全が今の利益主義の社会において効果的であり、また、現実的である。具体的な手法として、ゴミ廃棄の有料化・包装税(包んだ分だけ税金をかける)の導入・環境対策に関して優良な自治体や企業への、税制面の優遇措置(環境格付けの導入)・デポジット制の導入・買い物袋や箸などの有料化、などが挙げられる。

発達した経済社会はシステムの変化に対して大きな適応力を持っており、この新しい『環境』という分野を取り込むことは十分に可能であろう。一つの例として、現実に企業の間では『環境経営』という考えが取り入れられ始めている。トヨタのハイブリット・カー[プリウス]がそのいい例だ。このような経済的な手法は、今後さらに効果を発揮すると思われる。お金のためであっても結果的に環境を守っているという現実ができれば社会で環境保護の意識が高まっていくだろう。

この教育・経済の両面からのアプローチは日本の環境への姿勢を大きく変えることになる。そうして私たちが環境問題への危機感を共有しながら社会を動かしてゆくことで「循環・共生型社会」を創っていくことができるだろう。

<熊本大学>

1. 循環・共生社会における私たちの生活のかたちと地域のすがた

☆循環・共生のライフスタイルを求めるためには、循環・共生社会がどのような形をしているのかについて、フォーラム参加メンバーの共通の認識/理解が必要である。そのために、まず以下について討議する。

- ・なぜ循環・共生社会でなければならないか?
- ・循環・共生社会になるといまある私たちの社会はどう変わるのか?
- ・私たちのライフスタイルを変えることで、社会はどの程度、どのように変わるものなのか(私たちは、循環・共生の社会をつくることができるのか)?

2. 循環・共生社会をつくるための技術と資源/必要な要素とその活用(それぞれの地域において活用すべき資源:その具体的事例)

☆私たちが、自らの力で循環・共生社会をつくる事が出来るとすると、それをつくるための要素とプロセスが必要である。私たちは、いまある社会を破壊して、全く新しい社会をつくる事は出来ないし、それは現実的にとれない方法である。とすれば、循環・共生社会をつくるためには、いま私たちが持っているいろんな資源(人、システム・制度、自然)をすくい上げ、それを適切に活用する方法を考えて行かなければならない。そこで、つぎに、私たちの身の回りのそれに活用すべき資源をとりあげ、それがいかにこれからの循環・共生社会に活用されているか、または活用すべきかを討議する。

[熊本県の例]

- ・農・食・医の連携による健康社会づくり:菊池養生園の活動
- ・グリーンツーリズムの推進:小国町の活動
- ・環境保全型農業研究会/有機農業研究会:農業を中心にした環境活動
- ・産直/地産地消(学校給食のみなおし)/朝市
- ・環境熊本ネットワークの活動:市民活動
- ・グリコン1, 2, 3号:学生の自主的学習/活動
- ・環境都市水俣:行政施策
- ・容器包装リサイクル法:法律/規制

3. グリーンコンシューマーの実践

☆このような討議により得られた共通の理解を背景として、私たちが出来る、身近で効果的な生活のあり方として、グリーンコンシューマー/グリーンコンシューマリズムを取り上げる。このフォーラムのまとめとして、私たちに出来るグリーンコンシューマーとしての生活のあり方、それを基盤とした循環・共生社会のネットワークづくりについて、討議する。

6. 資源・エネルギーについて

エネルギーは我々の、毎日の生活はもとよりあらゆる経済活動の中に必須なものである。だが、大量の資源を消費することにより廃棄物も出てくる。例えば、プラスチックは大量生産、大量消費され、さらに「使い捨て」されるものが多い。リサイクルする場合も洗浄や加工に資源を消費し、二酸化炭素や灰という形で廃棄物が出る。

討論の結果、耕地を減らせば食糧難になり、二酸化炭素を出さなければ生活は不便に、資源を節約すると生産・経済に問題が生じる。ここで海老を例に挙げて環境問題(マングローブ伐採)を考えてみる。海老の消費量は日本が世界第1位である。海外の国は海老を日本へ輸出するためにマングローブを伐採し、養殖場を作る。もし、マングローブ伐採をこれ以上進めないためにライフスタイルの改善として、私たちが海老を輸入しなくなったら、海老を養殖することが産業の一つになっている国の今後の社会発展や経済発展はどうか。すべてにおいて、何かを守れば何か犠牲になるという関係があるように思う。

以上のことより、循環・共生できる社会をこれまで以上に考え、身近なものにしていくには現代の私たちの生活における生態系の位置づけ、そして誰のために、何のために自然と地球と共生していくのかということを考え、明確にしていかなければこの問題に取り組む意義がわからなくなってくるように思う。単に「一人一人の心がけ」と済ますのではなく、人々が関心を持ち、私たちに何ができ、どうすべきかを考える機会を私たちから多くの人々へと広げていくことが肝要ではなかろうか。ぜひ、皆さんのライフスタイル論もあわせて考えていきたい。



『都城市地下水の家畜排泄物による窒素汚染』

宮崎県は畜産が盛んであり、都城市はその中心である。その都城市の畜産によって排出される糞尿中の窒素が地下水汚染の原因の一つとなっていることを知った。糞尿を生のまま、あるいは発酵させて、堆肥として田畑などに施肥すると窒素が細菌によって酸化されて硝酸や亜硝酸となる。硝酸や亜硝酸は雨水などに溶けて地下に浸透し、地下水に入るが現在の浄化処理法では除去されにくいので、水道水を地下水に頼っている都城市では地下水汚染がそのまま水道水汚染につながると考えられる。飲料水から硝酸や亜硝酸として窒素が過剰に特に乳幼児の体に吸収されると亜硝酸中毒が引き起こされる。畜産によって排出される窒素が正しい形で処理されなかったために窒素循環がうまく行われていないという事から、都城市における家畜の糞尿の使用が現在どう行われているか調べてみることにした。調査方法として、九州農業試験場、JA、都城市役所に電話で問い合わせた。また、インターネットも活用した。

糞尿を堆肥化する場合、途中で切り返しを行いながら糞尿を発酵させる。発酵は 70℃以上の高温を伴うため、糞尿中の害虫は卵を含めて死滅し、雑草の種子も発芽しなくなる。糞尿をそのまま施肥した場合は悪臭を伴うが、完全に発酵させた堆肥に悪臭はなく近隣の公害はない。また、堆肥は遅効性に優れているので窒素分が植物に吸収されやすくなり、窒素分が土壌中、ひいては地下水に漏れ出すことを防ぐ役割もする。かつて大量に施肥すればそれだけ作物が大きく育つと考えられていた頃に比べると、環境への影響を考えて施肥量は減ったようである。以前は堆肥などとして処理しきれなかった糞尿は野積みや素掘りによって処理されていたので、それらが地下水汚染の大きな原因となっていた可能性がある。しかし、2000年10月に施行された環境三法により環境への悪影響からこのような処理の仕方は禁止されたため、現在は行われなくなっていると思われる。環境三法とは家畜排泄物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律である。現在の都城市の畜産業界は家畜糞尿の堆肥化を進めていることが分かった。それは環境三法を始めとする法律や、有機肥料を使って育てられた野菜は化学肥料のみを使って育てられた物よりも消費者需要が高く、それに伴って農家も注目しているなどの影響が大きいと思われる。窒素循環の大きな障害の原因の一つに、飼料の大量輸入がある。すなわち、飼料が国内で十分に生産されずに、国外からの輸入飼料に依存しているため窒素の過剰流入が起き、それによって土壌の窒素処理能力を上回ってしまった窒素分が地下水に流入して汚染を引き起こしている。

この問題の解決が急がなければならないと思う。

窒素が地下水を汚染することなく循環されていくことを解決するには、家畜から排出される汚水を浄化槽で処理し、排水基準を満たし、環境汚染の心配がなければ河川へ放流し自然にもどす。



自然の浄化作用を経た新鮮な水を家畜に供給する。そんな大きな自然の輪の中の水循環を考えることも重要だと思う。

そしてまた、大量に飼料を輸出する事によって窒素の過剰流出が起きている。それに伴って、輸出先である日本では窒素の余剰が起きていると考えられる。余剰分を日本で施肥すればまた新たな窒素汚染が発生しないとも限らない。また、今使われている化学肥料を堆肥に全て置き換えたとしても家畜糞尿

は余りある量に達している。そこで、この不均衡を打破するために、余剰な分をコストは掛かるだろうが堆肥という形で輸出先に還元してはどうだろうか。これが実行されることにより双方ともに解決に向かうことが予想される。収穫量や施肥のコストなどの目先の利益にとらわれずに、環境を考慮した正しい資源の循環が行われる農業を発展させて欲しいと思う。

<鹿児島大学>

『循環型社会について』

今日私たちが直面している地球規模での環境問題は、私達の身近にあるといえる。それは、環境問題がゴミ問題やエネルギー・資源問題といった、私たちの日常生活と直結した問題を内包しているからである。そこで私たち鹿児島大学では、身近な視点から地球環境問題をとらえ、それらをふまえて今後どのような社会の実現が望ましいのかについて考えた。現在ほとんどの先進工業国では、大量生産・大量消費・大量廃棄というシステムをとっている。

それによって人類は、資源エネルギーを大量に消費し、手に余るほどのゴミを生み、地球に大きな負担をかけている。そして、そのことが人類社会の持続性を危機に陥らせてしまったといえる。

地球が空間的にも資源的にも有限であるため、そのような社会システムが続けられないのは明白である。

では、なぜそのような社会が生じたのだろうか。それは、産業革命からの人類の進歩の積み重ねによる歴史の必然ともいえるだろう。豊かになりたいと願う人々が増えていけば、それに答えるべく誰もが豊かな生活ができるような社会システムが生まれることになる。よって大量にモノをつくり、それをより安価に提供する社会ができた。しかし、この流れは見直されるべき時にきている。先に述べたように、地球は有限である。大量生産・大量消費・大量廃棄型社会はこの有限な地球において持続不可能である。

それでは、持続可能な社会とはどのような社会だろうか。それは持続可能なシステムを持つ循環型社会であり、技術的・社会的・人間的な側面を持つものである。

循環型社会における技術的側面の例としては、最近話題の電気自動車がある。これは、水素ガスと空気中の酸素を反応させてエネルギーを得ており、排出されるのは水だけという地球環境にとって望ましい自動車である。また、太陽や地熱といった自然エネルギーの利用や省エネ技術などは、近い将来枯渇してしまうであろうエネルギー源に代わるものとなる。これらの技術は、まだ一般の人々が利用できるほどの技術とはなっていないが、循環型社会に必要な要素といえる。

次に、社会的側面の例としてはゴミのリサイクルが挙げられる。国内で今年4月から施行された家電リサイクル法は、製造業者にリサイクル義務を課すことによってそれをより効率的に行うことを目的としている。更に、企業側に製品設計の段階からリサイクルされることを想定した製造をするよう促す効果もある。また、鹿児島市内では7月から古紙類の分別収集が始められる。

これらは、消費者が身近に環境問題を考えるよい機会ともいえる。このように、社会の中に循環の仕組みを整えることも重要である。

最後に人間的側面がある。現代の社会問題として、プライバシーの過度な尊重や地域コミュニティの崩壊による人間関係の希薄化がある。物質的な豊かさは経済指標で測られるもの以外は無価値としてきた。その結果、モノにあふれた社会の中で人と人との交流やつながりが減少していき、心が貧しくなった。物質的な豊かさに陰りが見えはじめた今、精神的な心の豊かさを目指すべきではないだろうか。物質的豊かさが求められるものが貨幣価値のあるものだとしたら、心の豊かさが求めるものは貨幣価値では測れないものである。それはすなわち、人と人との繋がりや自然環境の豊かさ、未来に生きる私たちの子孫である。このような豊かさを求めることは、物質的な豊かさを求めるよりもずっと大切だと私たちは考えた。



以上に挙げた循環型社会の3つの側面は、いずれも密接にかみ合っている。例えばリサイクルにおいて、社会が動き出してもリサイクルを効率よくできる技術がなければならぬし、人々の関心や意識が伴わなければ機能しない。循環型社会が正常に機能するためには、その三原則の足並みが揃うことが重要である。

私たちが生きているこの地球は、現在様々な問題を抱えている。その中でも環境問題は私たち人間の活動によって発生したものである。そして、それらは現在の私たちの生活を脅かすものとなっている。かつて人間は自然を支配の対象として挑み、その資源が無尽蔵にあるかのごとく採取した。それは前世紀の大量生産・大量消費社会でピークとなる。その一連の流れの中で生じた大量の廃棄物の処理は、先延ばしにされつづけている。そして、このことが更に人間環境に負担をかけ、現在・未来の私たちの生活に悪影響を及ぼしている。この問題において、私たちは被害者であり、加害者でもある。この二面性は、動物的人間として自然から影響を受ける「ヒト」と、自然に影響を与える「人間」とが独立に存在しているためにあり、「自然」と「人間」の関係ともいえる。これからの社会において、この「ヒト」と「人間」、「自然」と「人間」がどのように調和し、共存していくことができるのかを考えていくことが大切である。循環型社会という新しい価値観のなかで、これに対する答えが実現可能であるものと期待する。

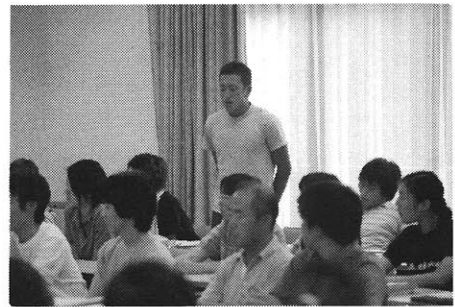
このように私たち鹿児島大学では、身近なことから視野を広げ、循環型社会について考えてみた。皆さんはこれからの社会のあり方についてどう考えるのか、広く意見を求めたい。

<鹿屋体育大学>

『高齢者・障害者との共生(体力・スポーツという観点から)』

体育・スポーツを通して様々な人間と社会において共に生きることができる。それは、対象が限定されるべきではない。しかし現行の社会では、体力の低い高齢者や障害者と、いわゆる一般若年者と体育・スポーツにおける共生の環境が不十分である。さらに、日常生活においても、体力の低い高齢者・障害者との共生の環境はいまだに整備されていない。そこで、本稿ではスポーツを含む日常生活における高齢者・障害者との共生における問題点について論じる。

高齢者との共生が重要なのは、まず高齢者が今後さらに増加することがあげられる。高齢者人口の増加は先進各国共通の問題である。日本における65歳以上の人口の割合は17.5%とイタリアに続いて高く、日本は既に「高齢」社会である。高齢人口は今後も増加するといわれており、医療費や高齢対策費などの社会負担増加、介護人口の不足という問題も生じさせると予測されている。また、従来、国の健康・公衆衛生の指標あるいは国力の指標として考えられていた平均余命の延長は人口の高齢化の基礎であり、逆に社会的問題を生じる要素になっている。定年(60歳)から余命が20年もあり、その20年の中で、エイジズム(高齢者への社会的差別)、アルツハイマーや脳血管障害による痴呆、寝たきりや寝かせきりの問題も生じている。高齢者に特化した運動トレーニングによる高齢者の体力向上は上記の問題点を量的に軽減することが可能であり、今後、積極的に行う必要がある。また、体力の高い若年者もいずれ体力が低下し、周囲から「高齢者」と認識される。しかし、体力が低下しても、人間は生活の質を維持するために身体活動・スポーツを実践する意欲を持つ。その動機を達成するためにも高齢者がスポーツの楽しみを享受する権利があり、その権利を守るために社会的な環境の整備が必要である。高齢者はスポーツを楽しむというだけで健康や目標、積極性などを持つことができる。個々によりスポーツを娯楽としたり、競技ととらえたりしている。これらは、生涯スポーツと呼ばれている。



次に障害者に関しても、社会福祉という観点から社会的努力が組織的に行われているが、未だに虐待や欠格条項などの差別があり、障害者と健常者との共生のインフラ整備も十分でないのが現状である。障害者との共生には、まず我々は見方を変えなければならない。ノーマライゼーションという考えがある。それはどんな人間も全て人間として普通に生活を送るために、共に暮らし共に生きぬくような社会こそがノーマルであるという考えである。そのためには、次に社会環境におけるバリア・フリーを達成しなければならない。バリアフリーとは文字通り障害をなくすことであり、米国の戦傷者が生活しやすい環境を作ることから始まった。その後、現在のように高齢者や障害者にも住みやすい社会整備や使い易い道具、社会的な意識も意味に含むようになった。そして、ノーマライゼーションの考えを合わせ、高齢者や障害者を区別せず、誰にでも使い易い「ユニバーサル」という概念が生まれた。この概念が我々にも我々の生活にも浸透していく必要がある。

次に障害者とスポーツであるが、現在の障害者スポーツでは日常生活、社会生活、体力や活動性の維持、積極的な社会参加を目的として行っている。障害者のスポーツはリハビリからレクリエーション、そして競技スポーツに移行し、後にパラリンピックなど世界大会等を目指す人もいる。障害者にとってスポーツは個人の自己実現のためには必要不可欠なことである。

スポーツを快適に行うにはそれ相応の体力が必要である。そこで、高齢者および障害者が一般人と生活面において共生するために必要な最低限の体力およびスポーツを積極的に楽しむための体力がいかなるものかについて皆と論議したいと考えている。

<琉球大学>

「持続可能な社会」への構造改革

人類は産業革命以降、工業文明の恩恵を受けて快適な生活を続けてきました。しかし、それと同時に自然環境の破壊も続けてきました。今日の世界では「大量生産」「大量消費」「大量廃棄」が行われています。砂漠化、地球温暖化、これは今、まさに地球そのものにかかわる深刻な問題です。日本では、大量のエビを輸入しています。輸出をしているインドネシアはどうでしょうか。

エビを輸出するために大量のマングローブの木を伐採してエビを養殖しています。日本が、環境保護のために伐採は良くないからエビはもう要らない、などと言えばインドネシアの人々は生活をしていけません。このように発展途上の国々では自然を破壊しなければ生きていけない国が多数あります。環境保護を叫んでも、今この世界の体制では大変難しいことのように思われます。

このようなことが起こるのは、先進国や発展途上国があるからではないでしょうか。また、環境と共生を切り離して考えるからこのようなことが起こってしまうのではないのでしょうか。私達の考える循環・共生型社会は、全世界の連邦国家ではないのでしょうか。国境があるために輸入輸出をしなければなりません。そのために環境破壊が生まれるならば、国境をなくし、技術が足りないところがあれば技術を持っているところが派遣し、資源が足りないところには資源のあるところがあげたりすることができれば、まさに私達の理想とする循環・共生社会ではないのでしょうか。

自然とだけでなく、人々とも共生することができ、自然の中でうまく循環するのではないのでしょうか。しかし現実では循環や共生面の問題はまだ山ほどあります。自分たちの理想とする循環・共生型社会にはまだまだ遠い状況です。だから先進国も今の工業文明を脱却し、適性消費、省エネ、リサイクルを原則とした循環型の文明に転換していき、発展途上国の見本となっていかなければならないのではないのでしょうか。小さいものでも大きくなれば大きな力になると思います。

そういうことでまず今、私達がしなければならないことを考えていきたいと思います。次に、私達は「今何ができるか」ということについて考えました。まず、身近な例を挙げると沖縄県北中城村大城集落での地域住民による参加型環境改善活動(花咲じじい)の例があります。



今日の環境問題が生活行為全般に関わる社会問題であつて、市民一人一人が環境に配慮した生活様式を実践することが必要になってきたことを考えると、この参加型環境改善活動は大変重要な意味を持っていると考えます。海を渡った国、デンマークではビンやペットボトルを数十回使用することによって、循環型リサイクルを実践しています。またこの国では消費税を25%にすることで、消費を抑制する体制もとられています。また、デパートなどでの過剰包装は、ライフスタイルに起因する環境負荷として挙げられます。そこで、自ら袋を持っていく事などの

努力は大切だと思います。今年、わが国では家電リサイクル法が施行されました。ごみの量を減らすために、廃棄後の処理が困難な製品に関しては、その製品の価格にごみ税を上乗せするといったことは今後もっと必要になってくるだろうと思います。これまでに時代を先取った多くの企業が、ハイブリッドカーに代表されるエコロジカルな事業を行ってきましたが、地球環境に評価できるような目立った結果が得られていないことを考えると、国が介入して行われたソフト的な整備は効果があるのではないかと考えます。さらに、リサイクルがおこなわれている製品に対して、国がお金を援助し、再販売価格が下がればリサイクルが進展するのではないのでしょうか。私達は、一時的な考えで金や時間を費やすより、長期的な計画を立て消費をすべきだと思います。循環と共生は地域活動から始めることが重要であると考えます。また私たちは、自分たちにできることを訴えていくことで循環・共生型社会を目指していくことを提案します。「持続可能な社会」への構造改革が早急に必要な現在において、多くの人たちが環境問題を知り、意識改善をすることによって、ライフスタイルを変化させることが必要なのではないでしょうか。

●感想文

○学生

福岡教育大学 村上智美

『九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して』

私がこの合宿共同授業に参加したのは、テーマに特別な関心があったわけではなく、日頃から、他の大学生と関わり合うことで輪を広げてみたいとの気持ちをもっていたので、これはいい機会だと思い参加しました。そういうわけで、事前授業へ熱心に取り組んだとは言える状況ではなく、他大学と比べると不十分だったことを、今、反省しています。

研修所は山に囲まれた緑豊かな所で、都会にない雰囲気醸し出して、いい環境の中で過ごすことができました。近くには八丁原地熱発電所があり、見学の際に説明を聞いて、この日本最大の地熱発電所の技術の高さに感心したりもしました。

私は、この合宿により自分が福岡教育大学の学生であることを実感しました。いつもの大学生活ではそのようなことを意識することすらありませんでしたが、合宿中はそれぞれ違う大学から参加しているので、周りが、福岡教育大学の学生として接してくるため、それを意識するようになりました。「大学とはいろいろなことを学ぶ場であり、自分の大学で力を身に付けることができれば、大学の名前など関係ないのでは。」という意見（九州芸術工科大学が九州大学と合併することについての雑談の中で）を聞きました。それによって、私は、今ここでみんなと同じテーマについて考える一人の学生であると共に、福岡教育大学の学生であることを強く感じました。

この共同授業では、他大学の教官の講義や自分の専攻以外の講義、例えば医学、芸術、経済、環境、農学などのいろいろな角度からみた講義を受けることができました。これは貴重な経験だったと思います。講義、討論を通じて私なりにまとめると、いままでは大量生産、大量消費という循環・共生を全く無視してきた社会だったと思います。その結果として、いろいろな問題が発生してきているのです。この問題の解決は非常に困難だと思いますが、これ以上問題を多く、大きくしていかないためには一部の人だけでなくみんなが今の問題に真剣に取り組む必要があると思います。そのためには、まず適切な情報提供が必要です。ドイツのような環境への取り組みが進んでいる国について紹介することは、日本がどれくらい環境に対する認識が遅れているかを知るのに、またこれからの参考とするのに必要なことではないでしょうか。しかも、昔のドイツは日本と変わらない状況から少しずつの活動とさまざまな政策の結果、今の環境を作ったのです。だから、今私達がすべきことは小さな行動から、またこの小さな行動を積極的に持続させるために、環境に対する視野を広げ、関心を高め、しっかりとした土台作りが欠かせないと思います。それが、循環・共生型社会を目指す第一歩ではないでしょうか。

合宿共同授業が終わり、いつもの生活に戻り感じたのは、以外と小さな環境活動が行われていることでした。このことに気づくことができたのは、この共同授業で環境に対する意識を高めることができたからだと思います。自分がここで学んで得た大きな財産を無駄にしないよう、積極的に行動して役立てていこうと思います。

今回の合宿で、メインテーマが「循環・共生型社会を目指して」ということで、合宿の事前学習でも自分なりにいろいろ考えたが、参加することによっていろんな考え方があることを学んだ。

事前学習では、毎週の話し合いやら課題やらで、自分の時間を裂いて、かなりつらいものがあった。私だけ2年生であとはみんな1年生だし、友達もいなかったから不安は大きかった。学部も私だけ工学部ということで、勉強しているジャンルも大きく違いがあったので、多少やりにくい部分はあった。この調子でいくと、もしかすると合宿に行った先でも仲良くできる人はいないのでは、と思っていた。また、メインテーマに沿った話し合いでもいまいち自分の考えが頭の中で整理できずにとまどっていた。合宿では、どのように討論などするのだろうか、自分の考えはうまくいえるのかと、頭の中がいっぱいだった。

実際合宿に行ってみると、初めは人とうまく接することができるのだろうかと思っていたけど、私の部屋が女20人の大部屋だったので打ち解けることができた。しかし、私の部屋の場所と環境にびっくりした。20人寝れるかどうか分からない広さと、日の当たらないような陰気な雰囲気、さらに大きなアリがたくさんいた。他の棟の部屋を見てみると洋室で気温は暖かくてなんと快適な、とびっくりした。同じ参加費なのにこの差はなんだと少し疑問を感じた。この部屋について教授の方々に自分の意見を言ったりと、自己主張の勉強にはなったと思う。しかし、今でもこの差については心残りな部分である。

私はこの合宿共同授業へ参加するに当たって、これまでの事前学習の時以上に「循環・共生型社会を目指す」ためにはどうすればよいのかということについて悩んでみようと思っていた。

まず、他大学の教官による講義を受けることで、「循環・共生型社会」というテーマに対して、身近な日常品であるプラスチックやゴミ、音やエネルギーなど、私を感じた事もなかった切り口から物事を見ていることにとっても驚いた。また、その後の討議やフォーラムから、他大学の様々な学生の意見を聞くことで、自分の考えを修正できたり、今まで心の中にあつた意見に自信を持つことができ、とても新鮮で有意義な時間を過ごすことができた。目から取り入れる知識も必要だが、耳や口、目を使って取り入れる討議の場は大切だということに気づいた。しかし、自分の意見をはっきり言うことのできる多くの尊敬できる人を見ていて、自分の意見を自信持って発言できない自分にはがゆさをも感じた。その中で、循環共生型社会をめざすために自分には一体何ができるのかということにも苦しんだ。「ゴミを減量する」などという具体的な行動を実行しようと思いついても、「自分一人だけがやっても意味がない」という結論へとたどり着いてしまう。しかし、最後の全体討議で「100人に1人でも考え行動する人がいれば、200人集まれば2人になるし、その100人に1人の集団が多くの人に伝えていくことで輪は広がっていくのではないだろうか」という発言を聞いて、小さな事でも行動に移すことの大切さを知った。

個人のライフスタイルとその基本にある意識や価値観の土台を形成する機会として、この合宿共同授業は必要不可欠なものだったと思う。現代、様々な問題が発生する中で、この問題に触れられて本当によかったと思う。言葉に表せば短いテーマだが、考えていく中で無数の切り口を発見でき、その様々な視点に立つことによって、自分という人間を広くし、豊かにできたのではないかと感じる。このとても濃度の濃い4泊5日間、一つのテーマによって、参加者全員の中で一本の線を感じることもできた。本当に充実した時間を過ごすことができた。この合宿共同授業で学んだことを必ず今後の自分の生活に生かしていくつもりである。

私は最初、この合宿には半分くらい単位目当てで参加した。しかし、この合宿ではあまりにもいろいろな、そして大きな事を学んだような気がする。まず、「循環共生型社会をめざして」というテーマに沿った講義を受けた。他の大学の教授の講義を受けることはなかなかできないことで、今回、その貴重な体験ができ、そして、一つのテーマに対して、様々な点からの、それぞれの体験が生かされた講義を受けることができたので、とてもよい勉強になった。フォーラムでは、私は一言も発言できなかったが、時間中ずっと他大学の人たちの意見の濃さ・深さ・知識の豊富さに圧倒されていた。大体同じ年齢の人ばかりなのにどうしてこのように差があるのだろうかと感心しっぱなしだった。それよりもこのような場で自分の意見をわかりやすくまとめ、全員に伝えようと主張している姿を見て、私もまだまだ未熟だなあと思った。後半の登山では、知らない人同士の班で上り坂のつらさを忘れるくらい和気あいあいと楽しい雰囲気でも頂上まで登りきることができた。曇っていて上から見た眺めはあまりよくなかったが、これほど高い山に登ったのは生まれて初めてだったので途中岩場など苦労したが達成感をひしひしと感ずることができた。自由時間や夕食などを通して他の大学の人たちと対等にいろいろなことを話し、自分の大学以外の大学の状況を知ることができた。自分の大学におぼれて満足してはだめだということを知った。

この合宿を通して、もちろんテーマ通りこれから私達地球人がやっていかなければならないことも学び、登山で自分の体力にさらに自信がつき、いろいろなところで新しい友達ができ、といいことづくしだった。しかも自分よりたくさん努力している人たちの目の当たりにしたのでこれからの目標ができた。私もこの4年間でいろいろなことに自主的に挑戦してそのたびに努力して自分を成長させていかなければならない。この合宿にも参加していなかったら、こんな事には気づかなかった。そういった点でも本当に参加してよかったと思う。

私は、今回の合宿に参加してみて得るものが多かったと思う。それは、他大学の学生との交流や今回の合宿のテーマである、「循環・共生型社会をめざして」に関する講義で得た様々な知識などである。

他大学の学生との交流は様々な形で行われた。学生同士での討論やフォーラムではもちろん、登山や交歓会でも仲間の輪が広がっていった。九州の大学といっても、学生は様々な地域から集まっているので、色々な方言や出身地の話がきけた。中でも琉球大学の学生と話すときは面白かった。沖縄独特の性格というのだろうか、彼らはとにかく誰とでも親しくできるようだった。交歓会でも琉球大学は沖縄の民俗音楽と踊りを披露してくれた。討論や学生フォーラムでは、みんなの環境問題に対する考えや体験談には驚かされた。そこで思ったのは、環境問題に対する考えを持っているのなら、実行しなければならないということである。それは、実際に環境問題について考えて生活をしている人の話を聞いて思ったことだ。そのようにして得ることができた友情や知識は一生のものになると思った。

合宿の授業では、今まで知らなかったことをたくさん学べた。環境問題に対する各地域での取り組みやボランティア活動などを知ることができた。また、世界の国によっても環境問題の取り組み方が違うこともわかった。先進国は積極的に取り組んでいるが、発展途上国は工業化が進んでいないという理由で、環境問題に取り組んでいないのである。このような先進国と発展途上国の経済格差による問題もあることも今回初めて知った。全体を通して、どの先生もこの授業のために多くの準備をされているのが伝わってきた。

たった5日間の合宿だったが、自分自身成長できたと思うし、いろいろな知識もえることができた。今後は、この合宿での経験を生かしてこれからの自分のライフスタイルを確立していこうと思う。

○教官

九州工業大学 野田 尚 昭



今回の合宿共同授業では、私が工学部の機械系教務委員を務めており、かつ、機械系教室が合宿共同授業の当番となっていたことから、企画／実施委員として事前学習と引率を担当した。講義も担当したかったが、やや専門外であるので、有機化学が御専門の吉永耕二先生に特別にお願いした。また、九州工業大学からはこれまで事務官が不参加で不便があったので、教務課の小川さんに合宿共同授業の参加と事務連絡等をお願いした。このように、3名の教職員の協力で今回の合宿共同授業への参加を有意義に進めることができた。本学から参加した、安藤、青木、志岐、山口、小山の5名の学生はいづれも熱心であった。例えば、九州大学の公開講座「地球環境とエネルギー」や北九州で開かれた環境問題に関する講演会に参加するなど積極的な態度が目立った。事前学習では、指定された参考図書などを中心にして、各学生に興味あるテーマで発表してもらい、その発表に対して意見を求めた。十分な事前学習を行ってきたので、合宿共同授業への参加をとおして循環と共生に関する認識を深めることができたものと考えている。特に、参加学生が学生フォーラムで活発に発言したり、班別討議のみならず全体討議の司会を務めるなど、積極的に参加する態度が見受けられ引率教官として楽しかった。他大学との交流は合宿共同授業の重要な要素であり、この意味で工科系大学の参加する利点は大きい。しかし、九州工業大学は来年度から合宿共同授業への参加を取り止める意向であり、たいへん残念である。

大分大学 吉岡 義正

『第26回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して』

今回初めての参加である。特に希望したわけではないが、テーマが「循環・共生型社会をめざして」であり、環境問題を担当していることから指名されたものと考えている。次年度の主管校であり、その観点から運営等に関しても注意を払う努力をした。ここでは、本合宿共同授業に参加した感想と問題点を述べる。なお、私は事前の打合せ会議等を所用のため欠席しているので、理解不十分な点があればご容赦願いたい。

1. 全般の運営は見事であった。この行事を実行するに当たり、並々ならぬ努力を当番校の長崎大学の教職委員が払われたことがよくわかった。敬意と感謝を表す。
2. テーマは今日的な課題であり、学生の興味も深いことから非常に適切であったと考える。

大分大学においては、希望者が例年になく多く、その調整に苦心する有様であった。毎年のテーマ変更も良いが、時代や要望によって同一テーマが繰り返されても良いかもしれない。

3. テーマの下に組まれた各講義題目は、ほぼテーマに沿っているが、一貫性に乏しい恨みがある。これは、各大学が自由に設定するため無理からぬこととはいえ、改善を模索する態度は必要かと思われる。

4. 各講義は、分割して行われた。即ち、同一時間帯に開催される複数の講義に学生は自分の希望に従って受講する。この利点は、ある程度少人数での受講となり、コミュニケーションが取れやすく、講義内容の充実が図られる。また、自分の興味に従って選択できる。

欠点は、聴きたい講義を選別しなければならないことと討論等での共通認識が得られにくいことである。討論が主体であるなら、欠点を除く努力が必要である。

5. 学生フォーラムにおいて、廃棄物問題（特にペットボトルの分別回収）に集中したことは、やや意外であった。青年期はもう少し大きな問題を取り扱うかと思っていたが、身近に限定しているような気がした。その理由として、システムに対する理解（全体を見る目）が不足する、一般化の方法に慣れていない、身近へのこだわりが大きい（実践しているものの意見が強い）ことが考えられる。フォーラムを行うに当たって参考案を示して、問題点の集約と方向性の制御を学ばせるべきであると考えたが、非常に難しい。

発達途上の学生に、これ以上のレベルを要求するのは欲張りかもしれない。

6. 各講義の討議は、フリーでおこなわれた。講義と討議の間隔がややあいていた。レポートの前に討議が行われてしかるべきではないかと考える。

7. アンケート結果より（なお、プラス評価はよかった、とてもよかったの単純合計値であり、参加人数を考慮していない。

①単位は各大学の授業で取れるはずのものなのに、参加のきっかけに「単位が欲しい（28%）複数選択」があったのに驚いた。

②講義等はプラス評価の割合が異なるのは当然であるが、講義単純平均63（45～92）%、野外授業74（65～81）%である。各大学の選抜組としての講義のこの得点はやや寂しい。70%台に乗せる努力を要する。

傾向として、具体的なこと・動きのあること・自分が理解できる範囲のこと・生活内のことのテーマに比較的高い評価がでている。

プレゼンテーションの方法にも工夫が必要である。

③討議のプラス評価の割合は、単純平均70（38～100）%である。講義と討議の相関（ $r=0.4$ ； $n=10$ ）は大きくない。平均が上がるのは、「そのテーマに関心のあるものが集まった、自分の発言で参加意識ができた」からとも考えられる。

④一方で、班別フォーラム63%、全体フォーラム45%、全体討論46%の低い数値は、本合宿共同授業の根幹を問う問題である。

⑤アンケートに、「親睦・交流」関係を入れると、おそらくプラス評価は大きいであろうと思われる。

⑥登山は、始まる前とは裏腹に84%の高い評価である。しかし、登山自身の本合宿共同授業における位置づけがよくわからない。

8. 参加学生にとっては、得難き体験をする場所であったと思う。92%の学生が、全体として満足しているアンケート結果はこれを反映している。

9. 本合宿共同授業には、多額の費用がかかる。シビアな時代にあって、その費用・労力に見合う成果が得られているかを検討する必要があるだろう。

10. 教員相互に授業感想をレポートするなどがあっても良い。学生も切磋琢磨の合宿共同授業であるなら、教師としても同様である。そして、例えば、各大学の希望する教員への公開授業としても良い。

○職員

福岡教育大学 酒 井 強

『九州地区国立大学間合宿共同授業を担当して』



昨年の合宿共同授業には16名もの申し込みがあった。本学の枠は5で、担当はその絞り込みに苦心したようだ。ところが今年の希望者は4名、いずれもおとなしい感じの女子学生で私の想像とは違った形で参加者が決まった。彼女たちはテーマに関心を持ったと云うより、他大学生との交流や合宿に興味を持ったようで、事前指導やレポート作成に意欲的に取り組んだとは云いがたい状況だった。担当教官も私もその様子を眺めつつ、学生の主体性に淡い期待を抱き、あえて、その方向を大きく変えるようなことは差し控えた。

そんな不安定な形で迎えた合宿共同授業だったが、初日のオリエンテーションの時には彼女たちにはそれぞれに新しい友人ができて

おり、表情も今まで見たこともないように明るい。フォーラムを無事乗り切れるかの不安を残しつつも、何かを得てくれるのではないかと予感できた。決して何事もなかった訳ではないが、無事に4日間の授業を終えることができた。最近、本学が課した彼女たちのレポートが手元に届いた。それぞれに受けた印象は違うものの、確かに意識の変換を感じさせるもので、この事業の意義を認識せざるを得なかった。彼女たちの中に環境に関する小さな意識が芽生えた。この芽生えが朽ちてしまうのか、大樹へと育っていくのか、見届けたいものだ。

最後に山内美智子のレポート中の「この合宿共同授業を企画運営してくれた人々、支えてくれた人に感謝しています。」を紹介しておきます。

九州大学 金 子 秀 男

『第26回九州地区国立大学間合宿共同授業報告』

合宿初日、晴、バスでの出発は少々の暑さはあったものの快適であった。私自身、合宿共同授業への参加は初めてで、具体的などのような内容のものであるかは大いに関心のあるところであった。研修所への道のりは景観も良く、研修所の場所も施設もなかなか良いものであった。(九大山の家はやや古くはあるが・・・)

今回のメインテーマ「循環・共生型社会をめざして」を目にして、これは大変時宜を得たテーマであると感じつつ、いくつかの授業を聴講した。数人の教職員受講者を交えての授業は、学生のみ受講の場合とは異なった緊張感があり、学生の受講姿勢もかなり良いように見受けられた。また、内容・素材に新鮮さと創意工夫が感じられ、学生達に



現在直面させられている社会的諸問題についての考察を促すものなど、とても有意義に思えた。

授業以外の合宿生活では、やや緊張気味の学生、非常にのびやかな学生、マイペース型の学生、多くの教職員など様々な人々との出会いの中で、学生達が日頃体験できないような規則正しい？生活、無駄のない質素？な食事、幾通りものゴミの分類、大勢での入浴、楽しい憩談、登山など他大学学生・教職員との交流を通して非常に意義深い経験をしたことであろう。一方、近時SCSを利用しての共同授業の実施が検討されつつある。今回の合宿共同授業を終えての私の感想は、SCS利用だけの共同授業では十分ではなく、情報化社会が進めば進むほど直接の出会いやふれ合いが重要になるものと思われる。当合宿共同授業の今後益々の発展を期待したい。

『合宿共同授業に参加して』

今回の合宿共同授業には当番大学の事務担当者として参加することになりましたが、この4月に20数年ぶりに学務関係の業務に異動し、また今回が初めての参加であったたので事務担当といいながら合宿共同授業の雰囲気や全く知らない、不安を抱えた状態での参加となりました。

しかし、始まってみると合宿共同授業を経験された先生や職員の方も多く、適切なお意見やご援助をいただき、また学生も食事当番等の役割は真面目に行うなど不安は徐々に解消し、先生方の講義や学生の討論を聞く余裕もできてきました。特に久住登山にいたっては学生以上に楽しんだのではないかと考えています。

なお、学生の中には、近代的な研修所と古色を帯びた九大の山の家との違いに、不満があったようですが、時を過ぎた今では良い思い出になっていることを願っています。

最後になりましたが、今回の合宿共同授業を無事終了できましたのは、参加いただいた教職員・学生の皆様のご協力のおかげと深く感謝いたします。



大分大学 後藤 和彦



「学生は誰も申し込みませんよ。」そんなことがあってたまるか。半信半疑、A4サイズの募集掲示に「他大学の学生たちと一緒にあって、互いの意見をぶつけ合う、またとない機会であり、学生だけで運営するので、主体性が身に付くでしょう。」などと、精一杯の思いを入れて体裁のいい掲示を作成した。

なかなかどうして、期限の3日前に参加希望者が参加枠を上回ってしまった。うれしい悲鳴。幸い、九州全体で参加者の調整をしてもらった結果、本学は1年生だけは希望者全員が参加できる見通しができた。昨年までとは違い、本年の参加者は全員が純粋に本人が希望しての参加なのだ。

経済学部からは、社会人入学の1年生。60歳の学生が申請した。この60歳の学生、原田さんは他の大学の学生も含め、人気の的だった。私も勿論頼りにしたし、他の学生達に対してはよきアドバイスを与えてくれたようだ。感謝したい。

リーダーの学生は、参加者全員の考えをうまくまとめ、実際の合宿にあっても、みんなを生かしながらの運営をしてくれたと思う。しかし、実はリーダーをリーダーたらしめたのは、他ならぬ参加者全員の力量であった。そのことは、当のリーダー自身が一番身に染みていることだろう。事前学習で、全員の考えをまとめて大分大学のレポートとして提出し、それを基に現地で学生達は議論を重ねた。ただ、事前学習に用意した参考図書を、十分には活用できていなかったことは悔やまれる。やはり学生は本を読まないのだろう。いっそのこと、参考図書を用意するのではなく、自分で図書館で捜せばいいのではないかとも思う。お膳立てはできるだけ排除することが、これからは大切なことなのかも知れない。

現地で学生が相談して来た。部屋が狭くて寝れない。どうもダニがいるようだ。なんとかならないかと。建築後70年という“九大山の家”は、そういう状態だった。実は我々も、その建物の部屋に押し込められていたのだ。4畳半に寝床を3つ。足の踏み場はない。かの女子学生の部屋はまだひどかった。敷布団を重ねて敷いていたのだ。大部屋に20人というのはかわいそうだった。しかも大研修室という、宿泊用の部屋ではなかったのだ。上手に敷けば、という人もいたが、今の学生にそんな芸当を期待する人は学生という存在を知らないか、学生に縁のない人だろう。

学生たちは、研修棟の立派な部屋に泊れる学生と自分たちとの間に差があるのは納得できないと言っていた。確かにそうだろう。4泊のうち、せめて研修棟と山の家と2泊ずつにして欲しいとも言っていた。私から見れば、このことは人権問題だ。事前に理解し納得して参加したのではない。来てみたら「こんな部屋に寝るの？」ではいけない。

運営をしていただいた長崎大学と九州大学の方々も随分と気苦労なさったことだろうと思うと、学生の立場ばかりを言っておれないが、そもそも合宿共同授業授業そのものに無理が生じて来ていることを感じたのは私だけだろうか。誤解を恐れずに言ったが、合宿共同授業の素晴らしさは言うまでもない。ただ、システム自体の無理を、このまま過して行くと、いつか事故に結びついてしまうような気がする。

飲酒のことは禁止と言いつつ、よく聞くと公式には禁止、個人的には構わないとか仕方ないとか……。私はといえば、最初から禁止と聞いていたし、学生と過ごす公式の場なのだから等と理由をつけて飲まなかったが、中には最初の夜からずっと飲んでいる人もいたようだ。自分が飲んでいる人は、学生に対して「飲むな」とは言えない。そこまで言う気はないが、もしかしたら、学生の飲酒を制限しない原因はというより、飲酒していいのかが曖昧な理由は、その辺にありそうな気もしてきた。いや、この詮索はもうよそう。もしかしたら必要なことなのかも知れないし、私にはその判断能力はないから……。いずれにしても“合宿共同授業”，曲がり角にあることは確かだろう。

でも、参加した学生全員が“いい体験ができた”“有意義だった”と言っている。でも、よく考えたら当たり前である。他にそういう経験をする場がないようだ。だからと言って、このままでいいとは言えないはずだ。それが合宿共同授業の存在理由の全てではないはずだから。施設の割に参加人数が多すぎる。人数を確保するために“山の家”を使わざるを得ないのだろうが、あの施設はもう既に、一握りの“マニア”の為の施設に過ぎない。

“マニア”にとってはたまらない魅力だろうが、一般的な宿泊施設ではない。となると、研修所の施設だけを利用するとすれば参加人数は半減する。そこで合宿共同授業の見なおしが必然のものとなる。そこで登場するのがSCSだ。ご存知、スペース・コラボレーション・システム。共同授業のシステムとしては、これを利用しない手はない。人数制限どころか、これまでの何倍にも拡大できる。それぞれの大学のSCS施設の収容数合計を募集人数とすることができる。場合によっては、聴講自由とすることもできる。しかし反面、合宿の意味がなくなる。参加者数を減らしても合宿にすべきか、参加者を増やしてSCSで取組むか、ということになるだろうが、いずれにしても一度SCSのシステムで取り組んでみる必要があるだろう。幸い本年度の授業に先だって、九州大学をキー局として、SCSを使ってネットワークを結んでみたが、目論見としてなかなかの結果だったと認識している。来年当たり本格的に実施してみて、その結果を踏まえて今後の方向付けをしていけば、ということになりそうな気配もある。

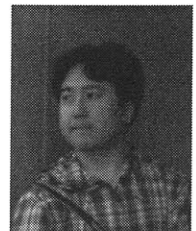
これだけで記述を終っては淋しいので最後に感謝して終えたい。最後の夜の懇親会の席、琉球大学の学生のリードでカチャーシーを皆で踊った。これこそが素晴らしい文化だ。沖縄に行ってもそういう場に出かけて行かなければ出くわせないものを、沖縄ではないこの九州、九重の地で、しかも多くの琉球の若者たちと一緒にカチャーシーを皆で踊れたことは、素晴らしい舞台だった。琉球大学の皆さんありがとう。そして、参加した全学生の皆さんありがとう。

鹿児島大学 高 崎 真

合宿共同授業に参加して

初めて参加しました。この話を最初に聞いたときは、事務官1年生ながらいきなりの大役(?)で多少びっくりしたのと同時に不安も覚えました。そこで学生に募集を募ったところ、どういうわけか女子ばかり応募してきたので、これにはさすがに驚きました。おかげで同僚(特に男性)に冷やかされながら不安の中で出発することになりました。

自分としては、5日間殆どカメラ小僧をやっていたような気がするのですが、有意義な時間が過ごせたと思いますし、他の学生や教職員の方々も有意義になったであろうと思います。講義形式の授業ではいつもの大学の授業だという面もありましたが、野外授業などでは学生が積極的に参加するなど、いつもの大学ではあまり見られないものがみられてよかったです。また、授業後の討論や学生フォーラムでは、積極的な発言者は偏りがちでしたが、いろいろな意見も聞かれて、私も発言こそ控えたものの無事登頂できて本当によかったと思います。最後に、参加した学生、教職員、特に主管校・当番校の方々には本当にお世話になりました。



『名物合宿共同授業』

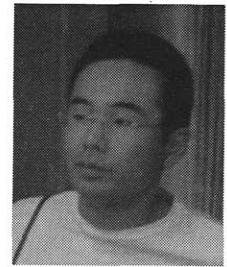
合宿共同授業に初めての参加でしたが、いろいろな面で大変有意義なものとなりました。過去に参加した方々から「涼しいし、山に登れて、おまけに温泉は入り放題ですばらしいところだ。」と聞いていましたが、まさにそのとおりでした。

講義では、各教官毎に趣向を凝らした授業で学生の興味を引くような授業だったと思います。学生にとって箇々の大学では味わえない授業を受け、考え質問し、また、積極的に意見を交わすことができ大変勉強になったのではないかと思います。

また、一日を掛けての山登りは初めてでしたが、幸い天候にも恵まれ、登りきった達成感と疲れが心地良かったです。今度は家族で挑戦してみたいと思いました。

今回のテーマは、私達の身近にあることで、私個人としても非常に興味がありました。ある公園にこんなことが書かれてありました。「一億の人がごみを捨てれば一億ごみが出る。一億の人がごみを拾えば一億のごみが減る。」あたりまえのことですが、身近にできることから実践していきたいと思います。

最後に今回の共同合宿授業のお世話をして頂いた長崎大学及び九州大学の教職員の方々に深く感謝し、「名物合宿共同授業」として末永く開催されることを願います。



『第26回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して』

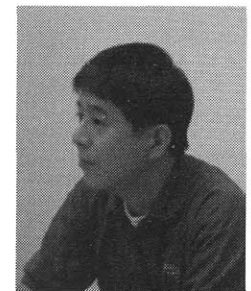
当初、とても長く感じた合宿共同授業であったが、あっという間に5日間という時間が過ぎてしまったというのが、率直な感想である。

教職員も含めてわずか6人という、参加大学の中では最も少ない人数ではあったが、田畑教授と学生世話人である大澤君を中心に、とてもまとまりがとれていて、講義や学生フォーラムはもちろんのこと、懇親会（特に某君の「愛の告白？」は大爆笑でした）の場においても、鹿屋体育大学の存在を九州中の国立大学に、アピールでき、「カヤ」ではなく「カノヤ」とよんでもらえるようになったことも収穫のひとつではないかと思います。

また、私個人としては、各先生方の講義を聴講したり、各大学の教職員と交流を深めたりすることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

全体的な感想としては、講義を聴講する学生の真剣さや学生フォーラムでの活発な討議等を見ることができ、とても感動したことを昨日のここのように覚えています。このような学生が多数いることに、日本の将来もまたすてたものではないとさえ思うことでした。

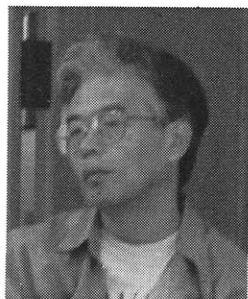
最後になりましたが、主管校の九州大学及び当番校の長崎大学をはじめとする各大学の教職員の方々ならびに、各学生の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。来年以降もこの合宿共同授業が有意義なものとしてありつづけるよう希望します。



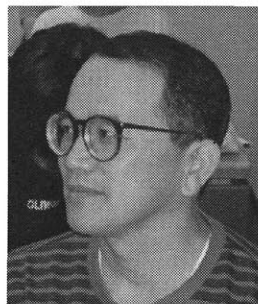
各大学の参加事務官



長崎大学
鳴海 事務官



琉球大学
比嘉 事務官



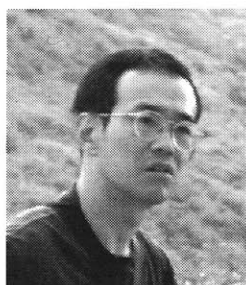
九州芸術工科大学
山本 事務官



九州工業大学
小川 事務官



熊本大学
山口 事務官



大分大学
池田 事務官

●第26回九州地区国立大学間合宿共同授業報告

ーオーガナイザーの仕事を終えてー



長崎大学 上江田一雄

○はじめに

今世紀1回目の九州地区国立大学間合宿共同授業（以下合宿共同授業と略）が、例年同様国立大学九重研修所と九州大学山の家の両施設を利用して、8月24～28日の期間開催された。

今年度の合宿共同授業は、幸いにも天候に恵まれて当初予定していた総てのスケジュールを消化して無事終了した。

今年度の合宿共同授業のオーガナイザーとして、企画から実施に至るまで、合宿共同授業全般について、アンケート集計結果、および来年度以降への要望に関する内容の報告をしたい。

なお、報告のスタイルは、限りなく記録の体裁にした。

企画から実施に至るまで

本学では全学教育（教養教育）の実施に関わる組織として全学教育実施委員会がある。その中に幾つかの専門委員会があり、その一つが総合科目専門委員会（平成12年度当時、今年度から総合科学専門委員会と改称）である。本学では合宿共同授業を総合科目として単位認定しているため、第26回合宿共同授業は総合科目専門委員会で行うことになった。

平成12年11月16日の九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議において第26回合宿共同授業の当番大学として本学が正式に決まった。その代表者会議で、「九州地区国立大学間合宿共同授業の実施に係る申合せ」も併せて決定された。それらを受けて、総合科目専門委員会内に、委員長の私、山内副委員長（当時）、小原助教授（第21回合宿共同授業で登山を担当）、杉本全学教育事務室長（当時）、および鳴海係長をメンバーとするワーキング・グループを設置して合宿共同授業の企画・実施に向けて検討を開始した。

平成12年12月初旬に開催されたワーキング・グループで企画案を検討した。

まず、実施時期（案）を8月24日（金）～28日（火）に決定した。

メイン・テーマ（案）は『循環・共生型社会をめざして』とした。その趣旨は『大量生産・大量消費・大量廃棄に象徴される現代社会は、天然資源を大量投入するとともに、生産や消費の結果としての大量の廃棄物や排出ガス、排水等を放出し、その行き先として大気や海洋、土壌等の拡散・浄化能力を暗黙のうちに想定するなど、資源や環境に限界がないことを前提として成り立っている。その結果として、現代社会はさまざまな環境問題を引き起こしている。これを避けるためには、まず人間の活動によって生じる物質を自然界の中でうまく循環できるようにし、環境への負荷を少なくしていくことが必要であろう。さらに、人間活動が自然からの恵みを受けた上で初めて行われることを踏まえ、自然界のメカニズムを理解して、自然との共生が図れるよう、人間活動を自然と調和させることも必要であろう。今年度の合宿共同授業は、21世紀の社会の緊急を要する課題としての「循環」と「共生」の可能性を明らかにしていくこと、さらにそれらの一層の充実化や明確化の方途を探っていくこと、を意図したものである。合宿共同授業を通じて、循環と共生を具体化していく21世紀の社会のあり方を展望し、また、その中で現状の問題性を浮かび上がらせることができるといってもある。』である。

学生フォーラム・テーマ（案）は『循環・共生のライフスタイルとは』とした。その趣

旨は『社会の土台をなす人々のライフスタイルを、現在の大量消費＝大量廃棄を基調とした高負荷なものから、消費や廃棄に伴う付加を極力削減した低負荷なものにいかにして変えていくかということが、今年度の学生フォーラムの主題である。社会システムにおける「循環」・「共生」の方向への技術開発や制度改革などが、人々のライフスタイルとその基本にある意識や価値観の変化を促し、広げ、根付かせていくものであろう。さらには、自然との触れ合いを通じて、豊かで多様な生態系や水や森林などの自然の物質循環を意識することによって、大量消費社会の物質的豊かさのみの追及とは異なる、日々の生活の中で人や自然と豊かに響きあう関係をつくっていく端緒をつかみ得ることも考えられる。学生フォーラムでは、ライフスタイルに起因する環境負荷の実態をまず認識するとともに、そのような負荷をもたらす生活者の行動パターンが何によって規定されているのかを、社会システム全体を視野に入れつつ分析し、そのシステムの変革も含めライフスタイルを具体的に变えていく道筋を考察する。その中で自然との触れ合いを取り込み、自然のメカニズムとも調和した、「循環」と「共生」の新しいライフスタイル像を考える。』である。

さらに、①講義は平行講義とする、②野外授業を実施する、③学生フォーラムは学生主体とする、④登山は全員参加とする、および⑤日程の中に教職員打ち合せと平行して学生世話人打ち合せを設ける事をワーキング・グループで決めた。②と④は2年ぶりの復活であり、⑤は新しい試みであった。

平成12年12月12日の第26回合宿共同授業企画委員会において、企画案が検討され、承認された。企画委員会には、メイン・テーマをより理解しやすくするためにテーマに関係したキーワード（循環の思想、共生の思想、異文化、社会経済システム、人口問題、南北問題、物質循環システム、生態システム、気候システム、産業システム、エネルギーシステム、廃棄物処理、リサイクル）を記載した文書を資料として提出した。

平成13年2月末、各大学から提出された講義題目等の調整を行った。野外授業の担当者が2名不足していたため、当番大学で担当することにした。

平成13年3月～4月上旬、全学教育事務室を中心にして実施案を作成した。学生フォーラム実施方法（案）は、『①学生が主体的に問題に取り組む積極性を育む学生フォーラムとする。②学生を主体としたフォーラムとし、教職員の発言は可能なかぎり控える。③フォーラムは、前半の班別討議と後半の全体討議で構成する。時間は各2時間とする。④参加学生を4班に分け、各班の構成は所属大学に偏らないようにする。⑤班別討議の司会者は1名とし、各大学の学生世話人から事前の学生世話人打合せ会の場で互選する。⑥班別討議の記録係は2名とし、各大学の学生世話人から事前の学生世話人打合せ会の場で互選する。⑦班別討議では、最初に各大学から提出された学生フォーラムレポートを報告する。それに基づいて討議し、ある程度の集約を図り全体討議につなぐ。⑧全体討議の司会者は2名とする。1名は当番校の学生世話人、他の1名は当番校以外の学生世話人とし、事前の学生世話人打合せ会の場で選出する。⑨全体討議では、最初に班別討議の集約結果を各班の記録係が報告する。それに基づいて討議を深める。』とした。

平成13年4月13日の第26回合宿共同授業実施委員会において、実施案が検討され、その結果レポートの作成に関する日程案の一部を修正して承認された。

それ以降、当番大学では本番用の冊子の作成が鳴海係長および福島係員を中心にして行われた。

平成13年5月31日には、合宿共同授業では初めての試みとしてSCSを利用した参加大学間の話し合いが午後6時から1時間行われた。

7月下旬、合宿共同授業の冊子の作成も終り、合宿共同授業の開始を待つだけとなった。

○合宿共同授業全般について

(1) 1日目

午後3時半から開講式・オリエンテーションがあった。開講式では、高木大学教育センター長（九州大学）による開講の挨拶があった。その後、簡単なオリエンテーションを私がした。

午後4時から最初の講義が行われた。それぞれの講義の場所および参加学生数は以下の通りであった。①長野教官（九州大学）による講義A「共生への契機としてのボランティア活動」は大研修室で44名。②上田教官（熊本大学）による講義B「健康なまちづくりと循環・共生型社会」は研修室(3)で13名。③土手教官（宮崎大学）による講義C「廃棄物問題と循環型社会」は研修室(1)で34名。

午後5時半からの夕食兼交歓会では、大学別の自己紹介があった。交歓会は例年同様アルコール飲料なしで実施した。

午後7時半から、講義A～Cに関する質疑応答・レポート作成が大研修室であった。

(2) 2日目

午前8時半から2回目の講義があった。①岩宮教官（九州芸術工科大学）による講義D「サウンドスケープー音と人間のかかわりー」は大研修室55名。②中原教官（佐賀大学）による講義E「環境に優しいeco-bike学」は研修室(1)で36名。

午前10時半から3回目の講義を行った。①吉永教官（九州工業大学）による講義F「プラスチックのリサイクルと環境問題」は研修室(1)で43名。②坂田教官（鹿児島大学）による講義G「ごみ問題の経済学」は大研修室で48名。

午後1時から4回目の講義があった。①藤本教官（福岡教育大学）による講義H「地球温暖化とエネルギー・資源」は研修室(3)で19名。②吉岡教官（大分大学）による講義I「環境（生態系）を守る考え方」は研修室(1)で33名。③堤教官（琉球大学）による講義J「エネルギー消費・都市気候・地球環境」は大研修室で39名。

午後2時半からの研修棟前での記念撮影は、集合した時点ではばらばらと小雨が降っていたが、カメラのシャッターを押すころは雨が止んで、無事撮影が行われた。撮影終了後、研修所隣の九州電力八丁原地熱発電所を見学した。

午後4時半からの講義D～Gに関する質疑応答・レポート作成が大研修室であった。

午後6時半から討議1が行われた。①講義Aは研修室(4)で7名。②講義Bは研修棟ラウンジで2名。③講義Cは研修室(3)で10名。④講義Dは大研修室で24名。⑤講義Eは研修室(4)で6名。⑥講義Fは研修室(2)で16名。⑦講義Gは研修室(1)で24名。

午後8時からの講義H～Jに関する質疑応答・レポート作成が大研修室であった。

(3) 3日目

午前8時半から午前中一杯を使って野外授業を行った。①田畑教官（鹿屋体育大学）による野外授業A「心拍数による運動強度の測定」は15名。②中西教官（長崎大学）による野外授業B「植物の野外観察ー植物のくらしを見るー」は41名。③馬越教官（長崎大学）による野外授業C「九重火山周辺の火山・地熱現象と噴火の痕跡」は35名。

午後1時から始まった学生フォーラムは、途中の30分の休憩をはさんで前半の班別討議と後半の全体討議で構成された。班別討議の前に大研修室で学生フォーラムの趣旨・実施方法・運営について私が説明した。その後、1班が研修室(1)、2班が研修室(2)、3班が研修室(3)、および4班が研修室(4)で、それぞれ班別討議を行った。各班の運営は、1班は司会が西田君（熊本大学）で記録係が石橋君（福岡教育大学）と吉鶴君（宮崎大学）、

2班は司会が田中君（長崎大学）で記録係が江崎君（九州大学）と齋藤君（鹿児島大学），3班は司会が砂川君（大分大学）で記録係が上野君（九州芸術工科大学）と大澤君（鹿屋体育大学），4班は司会が青木君（九州工業大学）で記録係が宮崎君（佐賀大学）と比嘉君（琉球大学），によって行われた。後半の大研修室での全体討議では，青木君（九州工業大学）と田中君（長崎大学）が司会を務め，最初に各班からの報告の後に全体討議に移った。

午後6時半から，討議2が行われた。①講義Hは研修室(4)で4名。②講義Iは研修室(3)で9名。③講義Jは研修室(4)で5名。④野外授業Aは研修室(2)で14名。⑤野外授業Bは大研修室で29名。⑥野外授業Cは研修室(1)で28名。

午後8時からの野外授業A～Cおよび学生フォーラムに関する質疑応答・レポート作成が大研修室であった。

午後9時半から小山教官（九州大学）による久住山への登山に関する事前説明が大研修室であった。2日目に渡邊専門職員（九州大学）と一緒に雨の中を下見に行ったときの映像を交えての説明だった。登山当日の天候しだいでは，登山を中止して体育館でのスポーツあるいはトレッキングに変更することもありうる旨が話された。説明の後，1～7班の各登山グループに分かれ，班長および副班長を選出した。

（4）4日目

天候は良好だった。全く迷うことなく登山を決行した。出発前に飲み物（500 mlペットボトルのお茶およびスポーツドリンク各1本）を各自受け取り，92名の学生全員と教職員が班単位で研修所を後にした。例年同様，牧の戸峠から久住山を目指した。全員が牧の戸峠登山口に到着し，そこで弁当を受け取り山に入った。登山ルートの途中では班単位で休憩し，その都度点呼が行われた。途中の沓掛山で1名の学生が体調不良のため下山した。西千里が浜から見た久住山は，生憎ガスがかかっていた。小山教官の判断で，昼食は久住別れの避難小屋近くの広場で取ることになった。山頂の視界は不良で，ガスの切れ間から時折下界が微かに望める程度だった。幸いなことに，山頂を下るところから雲の切れ間から阿蘇の山並みが時折姿を見せた。研修所では，古賀専門職員（佐賀大学）によって全員の帰着が確認された。

午後7時から中野心介君と中野祐介君（いずれも長崎大学）とによる司会で懇親会が，初日の交歓会同様，アルコール飲料なしで行われた。各大学の余興の順番等も含め，懇親会の進行は総て学生の話し合いによってなされた。合宿共同授業の最後の夜ということもあって，夜遅くまで盛り上がった。

（5）5日目

午前9時から今年度の合宿共同授業を振り返っての全体討議が大研修室で行われた。私の司会で討議は進められた。最初に各授業担当者から3分以内のコメントをしていただき，その後討論に入った。

感想文の作成およびアンケートへの回答の後，合宿共同授業の最後の行事である閉講式を行った。最初に当番大学を代表して橋本副学長の挨拶の後，次期当番大学に予定されている大分大学の吉岡教授から挨拶があり，今年度の合宿共同授業は終了した。

○アンケート集計結果

最終日の全体討議の後、今回の合宿共同授業に対するアンケート調査を全学生に行った。併せて感想文も提出してもらった。

アンケート項目は全部で30あるが、紙数の関係で総ての集計結果を記載できないので、多くの項目についてはまとめて記述する。

(1) この授業に参加しようと思ったきっかけは何ですか（複数選択可）。

自分から進んで参加しようと思った。	43%
友人，知人から勧められた。	19%
大学の教職員から勧められた。	4%
単位が欲しかった。	28%
その他	7%

今回の合宿共同授業では半数近くの学生が自主的・積極的に参加したことが伺える。

(2) この授業にどの程度期待していましたか。

とても期待していた。	19%
期待していた。	49%
どちらとも言えない。	24%
期待していなかった。	7%
まったく期待していなかった。	1%

約70%の学生が「期待していた」との結果で、今回の合宿共同授業に対する学生の事前の期待度の高さが感じられる。

(3) ～ (12) 講義 A～J について

まったくつまらなかった。	0～7%
つまらなかった。	0～15%
どちらとも言えない。	2～46%
よかった。	26～48%
とてもよかった。	9～52%

講義全体については、学生による評価は「すこしよかった」となり、評価の厳しさが伺える。ある講義では「まったくつまらなかった」学生が7%、別の講義では「つまらなかった」学生が15%もいて、オーガナイザーとして反省させられる。

(13) ～ (22) 討議 A～J について

まったくつまらなかった。	0～8%
つまらなかった。	0～25%
どちらとも言えない。	0～38%
よかった。	0～43%
とてもよかった。	25～100%

討議全体については、講義以上に厳しい評価である。しかしながら、中には全員が「とてもよかった」と回答した討議もある。

(23) ～ (25) 野外授業 A～C について

まったくつまらなかった。	0%
つまらなかった。	0～8%
どちらとも言えない。	16～28%
よかった。	25～53%
とてもよかった。	24～56%

野外授業全体については、いたって好評である。



(26) 班別学生フォーラムについて

まったくつまらなかった。	5%
つまらなかった。	5%
どちらとも言えない。	28%
よかった。	35%
とてもよかった。	28%

班別学生フォーラムについては、63%の学生が合格点をつけている。

(27) 全体学生フォーラムについて

まったくつまらなかった。	3%
つまらなかった。	14%
どちらとも言えない。	37%
よかった。	28%
とてもよかった。	17%

全体学生フォーラムについては、班別学生フォーラムよりも厳しい評価である。学生の好みは少人数の討議だろうか。

(28) 登山について

まったくつまらなかった。	2%
つまらなかった。	1%
どちらとも言えない。	13%
よかった。	25%
とてもよかった。	59%

登山については、84%の学生が合格点をつけ、学生には大変好評であったことを伺わせる。

(29) 最終日の全体討論について

まったくつまらなかった。	8%
つまらなかった。	17%
どちらとも言えない。	31%
よかった。	26%
とてもよかった。	17%

最終日の全体討論については、学生は全体学生フォーラムと同様な評価をしている。反省材料の一つである。

(30) 全体として、どの程度満足していますか。

まったく不満である。	0%
不満である。	1%
どちらとも言えない。	7%
満足している。	60%
とても満足している。	32%

92%の学生が合格点をつけ、当番大学として大変嬉しい結果であるが、「不満である」学生が1名いたことも事実である。

○来年度以降への要望

野外授業は2年ぶりに今回復活したが、学生にも好評であるので、来年度以降も是非開講していただきたい。

登山については、過去2年間は希望者だけの参加であった。今回全員参加としたが、学生の評価は大変よい。登頂の苦勞を共有することは、寢食を共にする合宿共同授業にとって必ずやお互いの絆を強くする。来年度以降も是非全員参加のスタイルを取っていただきたい。

主体的に合宿共同授業へ参加しているという意識を学生に持ってもらうために、今回初めての試みとして学生世話人打ち合せを数回開催した。結果的には、大変よかったと思っている。来年度以降も継続していただきたい。

今回特に頭を悩ませたのが、宿泊に関する件である。来年度以降のために事実のみを記しておく。宿泊施設として、これまで研修所宿泊棟と九州大学山の家を双方で使用してきた。昨年度まではまったく問題はなかった。ところが、今回、山の家に宿泊している学生から不満が出た。学生の指摘は、「同じ額の参加費を払っているが、山の家と宿泊棟の部屋の環境には雲泥の差がある。何とかして欲しい。」ということだった。

おわりに

今年度の合宿共同授業は成功したと思っている。ある先生からは95点の点数を頂いた。オーガナイザーとして大変嬉しい評価である。今年度の合宿共同授業の成功裏には、合宿共同授業に参加した総ての教職員の惜しみない協力があった。紙面を借りてお礼を申し上げたい。

それから、うまくいった背景には、多少の不満を持ちながらも我慢して最後まで付き合い合ってもらった各大学の学生世話人をはじめとする総ての学生の存在もあった。今回の合宿共同授業で寢食を共にしながら学んだ事柄を、今後、更に膨らませていただきたい。

更に、本学の職員の奮闘があったからこそ私のような人でもオーガナイザーを勤めることができた。近藤全学教育事務室長、杉本前全学教育事務室長、鳴海係長および福島係員をはじめとする全学教育事務室のスタッフに感謝したい。

最後に、合宿共同授業が、今後、益々充実発展していくことを祈念して筆をおく。

(牧の戸峠辺りは紅葉真っ盛りであろう。10月22日記す。)

○アンケートに記入された感想等

討議については、講義の内容から考えて、みんなと議論するというのとは少し違っているように思われた。しかし、自分の興味のある講義に関して、さらに深い知識を得られたという点ではよかった。

フォーラムについては、班別討議の時、自分の大学のレポートの説明が十分でなかったように見え、また、他の大学についてももう少し詳しい説明をしてほしかった。同じことの繰り返しで、多くのことについてみんなの意見が聞けなかったのが残念だった。

私は経済学部なので、今回の講義は理系的な授業が多くて興味深かった。サウンドスケープやプラスチックの授業は文系的な考え方に傾きかけていた私に別の視点を与えてもらうことができたと思う。先生方の研究の分野をそれぞれが循環と共生にからめて、お話しされていて、私たちの身の回りのことはほとんど循環と共生に通じていると分かったので今後身近なことごとこと深く考えていきたいと思う。

私はフォーラムで発言することができなかったが、参加者の多くが様々な考えを持っていることを改めて感じた。

いつも私の身の回りには、私と似たような考えを持った人がいて、意見のぶつかり合いなどあまりない状況で生活しているので新鮮だった。フォーラムを通じて今まで気がつかなかったことに多く気づかされた。地道な運動であるグリーンコンシューマー、ペットボトルの大量使用による問題……私の中でいろんな考えがあって結論がまだ出ていないが大学に帰ってからゆっくり考えていこうと思う。

普段大学では学習できないようなことをできて大変良かったと思う。しかも今回はテーマが「循環・共生型社会をめざして」ということでけっこう、専門家だけにまかしてできるものではなく個人個人が意識することによって大きく変えることができるのでいいテーマだと思った。

いろいろな意見がでたという点ではよかったと思う。討議はけっこう内容を勘違いして、自分の知識をひけらかすだけになるだけの人も多かったと思える。今回の合宿のメンバーはけっこう普段はおとなしめ、しかし、勉強はまじめでプライドが高い、みたくないいわゆるオタク系が多かった。そういう人達だけでなくもっと体育大のようなタイプの人の意見、物事をかっこつけて言わず率直に感じたことを語るような人がほしかった。

事前学習を講義のテーマに添ったものとしていたので、参加した講義に関しては大まかな内容はつかめていた。しかし、先生方のそれぞれの意見というのを聞いたというのは有益なものであった。特別な授業だからかは分からないが、質問のしやすい環境が見られた。

テーマは、様々なとりようがあっただろうが、先生方がおっしゃられるように、リサイクル面での話ばかりになっていたのが残念であったように思われた。幅広い視野から環境問題をとらえる柔軟さが欲しかった。

意見を言う人が、限られていたのも残念だった。

私が受けたのが興味を持ったのも自分で選んでいる講義だっただけに、全体として面白いものが多かったように思う。

印象に残ったのは、講義Gの「Try & Error」と講義Iの「誰のために環境をのこしていくのか」である。環境問題において十や百の綺麗事を並べるのは簡単であるが、大事なものは、一つでも自分の出来る事を自分のためにやっていくという事ではなかろうか。それが、自分が合宿で習った最大のことであったように思う。

フォーラムの場というのは、緊張感がピンと張り詰めてて、とかく人が意見をしにくい場であったように思う。それに比べて、討議の場というのは、先生の配慮もあって、私は少なくとも意見を出し易かったように思う。それは、議長の進め方の問題もあったと思うし、もしかしたら「フォーラム」という言葉自体に何がしか特別な感情を抱いていたのではなかろうか。また、学生の中には、自分で意見を持っていても、緊張していたりして自分の意見を言えなかった学生もいると思う。勿論、レポートでその分はまかなっていると思うのだが、そういった意見も両方大事にして欲しいと思う。

班別討議では最後の10分間はフリー討議を試みたのだが、意外に話が盛り上がって楽しかった。テーマに限らず、自由に討議できる時間を設けてみるのもいいのではないだろうか。

フォーラムは、班別討議から30分後にあるため、班での考えをまとめることが十分できてはいなかった。司会をやっていて、手元に相手の考え方などが、メモされていない場合の進行は本当に難しいと感じた。班別討議と全体フォーラムの日をずらしておけばもう少しスムーズにフォーラムができたと思う。

班別討議について……自分は班の司会を務めたのですが、本当に限られた人たちだけが発言し、他の人は、自分は関係ないという態度で、居眠りなどしているのはとても腹が立った。自分たちが、どういう目的で来ているのか考えてほしい。

全体討議について……ある程度は意見がしっかりと云えたので、自分としては満足 of いくものとなった。

最終討議について……何か討議というよりは、個人個人の主張ばかりが目立っていたような気がした。

全体的に質の高い授業が多かったと思う。循環・共生をテーマに環境問題の講義が多かったように思うが、各先生はそれぞれ意見が違い、きれい事ばかりの授業でなかったことが自分にとってとてもためになったと感じた。環境問題は、ゴミを減らす、リサイクルする、少量消費にするなどだけを考えるのではなく、その裏側にある生産業者、豊かな生活を求める私たちの心ということがあるということを学べた。

討議というものは、自分の意見、信念を最後まで押し通すというものだと思うが、この合宿に参加した人はそういうことを分かっている人が多いと感じた。中には専門用語を用いる人もいたりして、事前学習がしっかりしていると思われる人もいた。私は、その人達の意見を聞いて色々考えることもあったが、なかなか発言できなかった。それは、事前学習の足りなかつたせいもあるだろうが、一番の原因は引っこみ思案の性格がわざわざしていると思った。これからはそういう自分の嫌な部分を直していきたい。

色んな人達の意見を聞けて、自分のためになつたし、新たな自己発見にもつなげられて、討議・フォーラムに参加できてよかった。

講義はそれぞれに特色ある角度からのものであり、それぞれの立場からできる事もしなくてはならない事を知ることができたので、視野を広げるのに役立ったと思います。硬いだけのものでは僕らはモチベーションの余程高い者以外はあきてしまいます。今回の講義は、ユーモアのあるものであつたので好感が持てました。

フォーラムで発言する人の多さに驚いた。私は、鹿大の事前学習のときに、意見を述べたがそれが全員に（誰一人も）受け入れられなかつた。自分の意見が正しいか否かは定かでないが、たぶん発言したら猛反発されただろう。

自分が発言した方が良かったのかは分からない。しかし、自分の抱えている意見はある学問分野の影響を受けていることは確かだ。これから大学に戻つても、さらに環境に関する知識を深めたいと強く感じた。

やはり一番身近な課題であるゴミ問題の授業は興味深くきいた。坂田先生の授業もわかりやすく考えさせてくれる。また、建設的な授業であつた。この授業は、全員共通の授業としてやってほしかつた。そして、皆で共通基礎知識をつけたうえで議論をした方が、意見がそっぽを向かず、内容の濃いものとなつたと思う。今回の全体フォーラムや全体討議でゴミについてしか語られなかつた状況から思う。特に、グリーンコンシューマーやペットボトルに関しての現状を知つたうえで意見を出し合ひたかつた。

すごく感動しました。たつた九州の国立大学12校の中だけでもこんな違つた色々な視点で物事を考える事が出来る人がいる事に!!

やはり、大勢が集まつた場所で意見を述べる事はにがてな人が多かつたものの一人一人が必ず自分の意見を持っており、思う未来があることに驚きました。肯定したり否定したり、様々な形で一つの論題が動いていく様に、「この合宿のメンバーとして参加できて本当に良かった」と思いました。

● 帰学後の活動

○エコってますか？

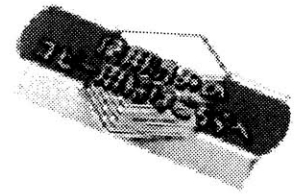
九州工業大学 青木 伸 朗



合宿共同授業に参加された皆さん、何か行動を始めましたか？九工大は、生憎9月から前期の期末試験が入っていたため、大きなことを始めるには難しい状況でした。しかしながら、一緒に参加した相方の志岐光君と、教科書片手に計画だけは練っています。二人で九工大に環境をテーマにしたボランティアグループを作ろうと決心し、試験が終わるのを一日千秋の思いで待ち焦がれています。僕らの知る限りでは、九工大の中にボランティアグループは存在していません。そこで、合宿共同授業に参加した僕らが先駆者となって形を作り、後輩たちへバトンを渡していくことで、九工大の中にボラ

ンティアを根づかせていけるのではないかと考えています。

とりあえず学内に着目して行動しようと考え、最初に古紙の回収の問題を取り上げようと考えています。事務や市役所の方と話をしましたが、九工大の中で使用している紙の量は、年間63トンに上り、その大部分である48トンは焼却ゴミに回されているのが現状だそうです。紙は、リサイクルの優等生とも言われ、木材から紙をつくる場合と比較すると、古紙を使えば3分の1のエネルギーで済みます。コピー用紙メーカーの富士ゼロックスによると、国内の古紙回収率は54.8%となっています。九工大では、その回収率を満たすためには35トンは再資源化していかなければなりません。団体として大学側にその旨を意見書として提出したり、僕らが回収日を定期的に設けて、回収活動を行っていくことを考えています。それだけでは物足りないのです。校内の美化活動を行うことも視野に入れていきます。また、飲料水の販売にデポジットの導入を訴えたりするのも面白いのではないかと考えています。



サークルのような形で団体を形成しようと考えて、学生生活課の方と相談しましたが、年々部活動やサークルに入る学生が少なくなっており、学生のエネルギーをもっと有効に使う手段を考えていた模様で、僕らの話に飛びついてくれました。大学側も学生の協力を必要とすることが多々あるようで、できるだけ学科に片寄らず多くの人材を早期に集めて欲しいと逆に頼まれてしまいました。学生生活課の感触が良く、協力してくれそうな姿勢だったので、まずは人集めから始めていきます。

今後、どうなるかは分かりませんが、とりあえず小さな一歩を踏み出しました。できたら活動内容を、<http://users.goo.ne.jp/hs-m8/>に掲載していこうと思いますので、機会があれば覗いてみてください。

みなさん、エコってますか？ それでは、また会う日まで...



学生フォーラムで司会をする青木君



懇親会では、「悲しいとき〜」と楽しく、みんなを笑わせてくれました。

編集者から一言

学生フォーラム，懇親会，登山とその場面の雰囲気に対応できる若者でした。

○「環境」をあらためて考える

佐賀大学 宮崎 寛大

今回の合宿共同授業のテーマは「循環・共生型社会を目指して」であった。しかし正直、この合宿を終えて久しくたった今でも、私は今自分が行っていることがそういった社会を形成しうる行為であるかどうか、その自信はない。私のホームページ（<http://www.ms.saga-u.ac.jp/~99s133/gassyuku/>）でもあったが、「環境にいいこと」という行為が一体どのような行為であるのか、また逆に、環境に悪い行為は何かというのがイマイチはつきりしない。

例えば、今回の合宿共同授業では、至る所でペットボトルを使用していたが、これは果たして環境に悪いことなのだろうか。また、懇親会の後にお菓子が大量に余ったが、これは果たして環境に悪いことなのだろうか。また、その余ったお菓子を勿体無いからと食べるのは環境にいいことなのか。そして、合宿内で何度も使われてきた言葉「リサイクル」。これが果たして環境にいいことなのだろうか。

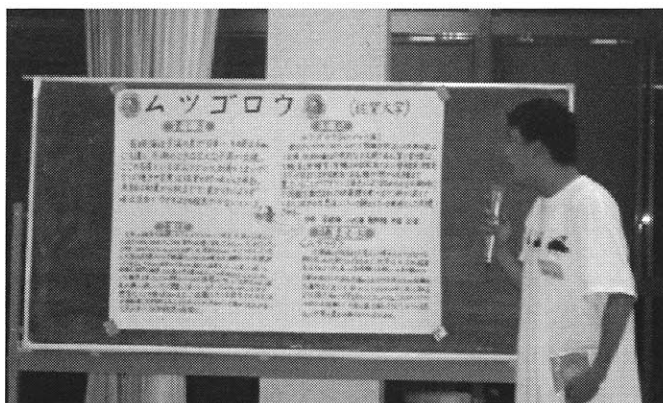
私は他の合宿参加者と自分のホームページ内においてそのことを討議してきた。そのことについてのホームページ内での結論はまだ出てないが、私としては、リサイクルというのは単なる延命処置であり、下手をすればリサイクルのやりすぎによって地球が滅ぶのではないかとも思っている。なぜなら、リサイクルと言えどもそれを行うには資源が必要であり、リサイクルされるゴミが増えれば、それは使われる資源の量が増えることを意味する。元々環境保全のためにリサイクルをやっているのに、そのリサイクルで地球を滅ぼしては本末転倒だ。

ここで先ほどの問題に帰ろう。ペットボトルを使用することは環境に悪いことか。そして、余ったお菓子を勿体無いからと満腹の腹に詰め込むことは環境にいいことなのか。答えはどちらもノーだ。ペットボトルに関しては、ペットボトルを使いすぎること（また、使ったペットボトルをそのまま捨てること）が環境に悪いことではないか。また、お菓子に至っては、最初から余るくらいの量を持ってこなければ良いのではないか。

上の2つの事柄には共通点がある。「Refuse」だ。よく4Rの中でこの言葉は使われるが、人々の多くは最終的な「Recycle」の方に目が行ってしまい、初期段階の「Refuse」には目を向けない。それは、現代人が大量消費社会に慣れすぎた結果であるといっても良いだろう。

ここで最初の話にも目を向けると、「リサイクルをやりすぎると地球は滅びてしまう」という結論から、結局我々ができる環境にいい行為というのは、最初からゴミとなる物を受け取らないということではないのか。

そのことに気づいた私は、今でもスーパーで袋をもらわないなどして実践している。政治経済を習ったことがある人なら分かるとおり、市場価格が同じであれば、需要量を落とせば供給量は落ちていく。そのようにして、徐々にゴミとなる物を地球上から消していくことが、今我々ができることなのではないだろうか。



編集者から一言

宮崎君が休憩時間に、ペットボトルのフタやラベルを分別をしていたのがとても印象に残っています。

懇親会で「有明海の環境」について発表する宮崎君

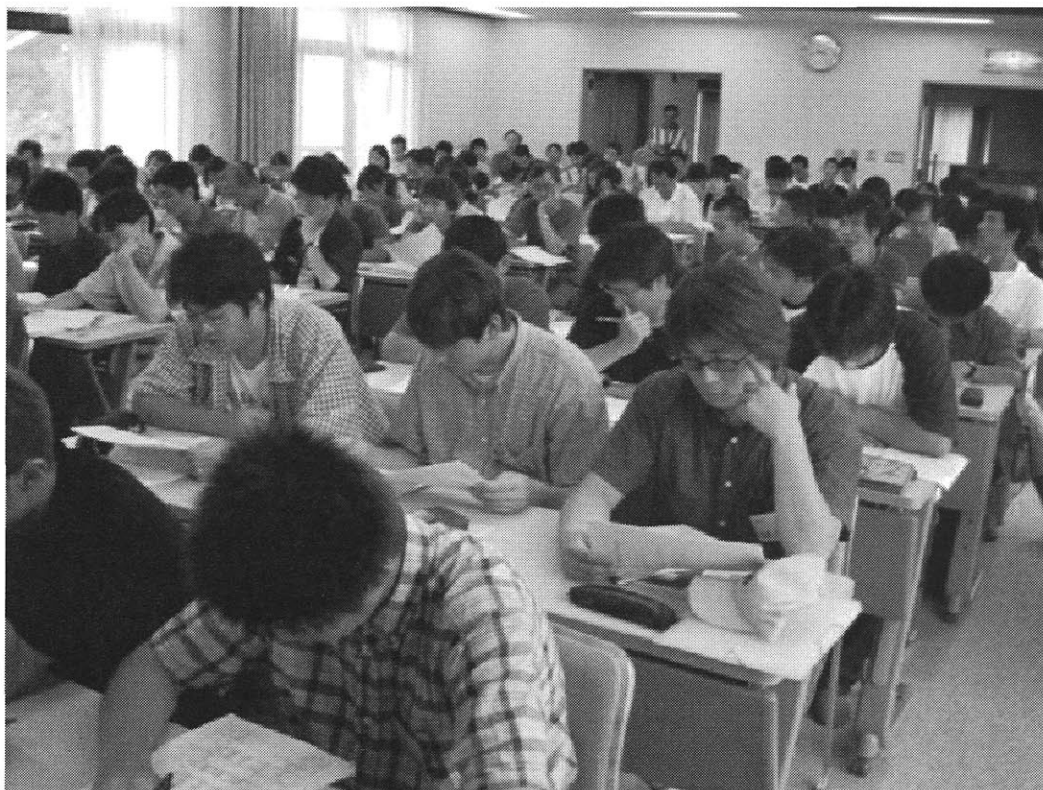
●合宿共同授業のこれから

－主管校 高木 誠 九州大学教育研究センター長のまとめ



この授業は既に四半世紀の歴史を持ち、その出立から今に至る経過は毎年の報告書に参考資料としてまとめられている。一方、合宿現場における日々の運営の実際・ノウハウについては、長年これに関わってこられた教官あるいは事務官が記憶に留めておられるのみのように思われる。実は、昨年及び今回の合宿共同授業において、この現場運営が大幅に改革された。改革のポイントは、昨年度の報告書に(当番校)琉球大学大学教育センター長の仲地先生がおまとめになっているように、「ノンアルコール」と「現場運営作業のスリム化」である。ここでは後者に改めて触れたい。

合宿共同授業の運営には、これまであまりにも人力を要してきた。これでは事業の継続に困難を来す恐れがあるむねが、しばしば指摘もされてきた。各大学とも、学内で定員削減と人手不足に悩んでいるからである。したがって昨年からは、当番校の参加職員数をそれまでに比べて半分に減らした。それでも昨年は、参加学生数が93名であるのに対して参加教職員数は32名であった。今年は学生91名に対して教職員35名である。教職員の全てが全期間中滞在したわけではないが、比率からいうとやはりぜいたくな授業である。もちろん、我々はその人力の投入に見合う教育成果が得られることを信じてこの授業を行っているわけである。しかし教育成果は、もともと明確な数量的メッセージとして周囲に伝え難い性質のものである。



授業の最後に参加学生に感想を記してもらおうが、これを読ませてもらうのは楽しい。合宿して共同して学び、また登山という動物として初原始的な肉体活動を共に行うことを通じ、他に代えられない知的刺激と人間としての交流体験を得ていることが伺われる。この授業をこれからも継続していくには、この成果をそれぞれの学内で分かち合ってもらって努力をすることがまず大切である。そして一方、この授業の継続へ広く賛同していただくためには、やはり合宿共同授業に参加する教職員をもう少し減らせるような、しかも教育効果は維持向上できるような方向で工夫が必要であろう。

昨年琉球大学が踏み出された方向に添い、今年、当番校の長崎大学におかれては実施にあたって一段の工夫を加えられた。たとえば実施要領に「巡回当番一覧」を新たに加えられた。また登山にあたっては、班ごとにリーダーと副リーダーを設けられたようである。合宿共同授業は、もともと見ず知らずの他人が集まり、共同して成果を生み出す企画である。したがってまず個々の参加者が、自分が置かれ、活動する環境条件をよく理解しておかねばならない。さもないと、個人的にどんなにやる気があっても、どう振舞ってよいか分からないままに短い5日間は過ぎる。今回、当番大学を中心とする実施担当者は、学生に必要な情報を十分に与えるとともに学生の自主性をうまく引き出すことにも成功したように思われる。このあたりのノウハウも何とか確実に引き継ぎたいものである。



上に教職員と学生がかかわる事項を個別に述べた。ではそのうえで、今後さらに「教職員の負担を減らし、しかも教育効果は維持・向上できるような工夫」をどうすればよいか。これについては参加経験の豊かな先生方、職員方にいろいろアイデアがおりと思う。私としてはキーワード程度の内容しか思いつかないが、①教職員と学生の間でのより密接な共同作業、②SCS等のIT技術を用いた事前学習及び交流プログラムの導入、が考えられる。

①については、現場の「実施要領」にもかかわることである。共同作業の場を設けることについては単にイメージを思い浮かべるだけであるが、たとえば巡回当番を学生と共にいる場面があってもよいかも。一体感をもって合宿共同授業を実施する上で、学生から率直な意見などを聞く機会になるかもしれない。また、具体案はないが、教員と職員がこれまで以上に密接に共同作業できるようなプログラムがあればよい。独法化が行われると、各大学内の日常においても、教員と職員の間で従来の役割分担を越えるような連携作業が行われると予測されるからである。

①については、合宿共同授業の事前打ち合わせをSCSを用いて既に試行した。参加予定の学生の自己紹介もあつたりして、意義が大きかったと私個人としては高く評価している。一般的な観点からも、テレビ画面を通じての交流の機会がITの発展とともに今後ますます重要度を増すと思われる。ITを用いる遠隔教育はもともと地域に限られるものではなく、国際的にも開かれたものである。教職員・学生ともに、これに対する訓練度を向上させる意味からも、来年度からはもっと積極的に取り組むのがよいと思う。講義と事前学習の主な部分をSCSによって済ませ、合宿現場では専ら討論を主体とするプログラムによって行うことができれば、これまでのやり方で得られる教育成果を失うことなしに、合宿期間を1日削減することも可能と思われる。



今回の合宿共同授業には私は都合のため1泊しか参加できなかった。しかし、終了後には何人もの教職員から、意義深い成功を収めたむねを伺った。学生の感想文にもそれが伺われる。当番の労をとられた長崎大学の教職員の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げます。

●参考資料

1. 第1回九州地区国立大学間合宿共同授業開催に至るまでの経緯

- (1) 昭和51年9月中旬に、九州大学武谷健二学長から奥田教養部長に、文部省・学長レベルの意向として『国立大学間合宿共同授業』の試みにつき、その趣旨等の説明があり、九州地区で実施の見込みがあるかどうか検討してほしいとの勧めがあった。
- (2) この学長の意向をうけて奥田教養部長は、昭和51年10月6～7日の両日に開催された第25回九州地区大学一般教育研究会（於・大分大学）の際に、それに出席した長瀬佐賀大学教養部長、西岡熊本大学教養部長、高橋長崎大学教養部長の三人と会合し、共同授業の構想についての概要を説明し、意見を求めた。これら3大学の教養部長からは、いずれもこれに賛成する旨の意向が示され、九州大学が主催して、2月末から3月にかけてと、3月中旬の、前後2回に分け、長崎県島原市九州地区国立大学島原共同研修センターを会場とし、3泊4日の会期で、それぞれ100人ずつの規模によりこれを行うことに、意見の一致をみた。
なお、各大学では、このための部内態勢をそれぞれ整えることについても、申し合わせがなされた。
共同授業の実施を前後2回に分けたのは、参加希望者が多いのであろうとの予想と、入学試験の第一期校と第二期校との間には、2～3月の学内行事予定に差異があるので、参加の便宜を考慮する必要があるという事情との2つの理由による。なお当初は、第1回は文系講義に、第2回は理系講義に、それぞれ重点をおくことが予定されていた。
- (3) 本共同授業の具体的計画は、昭和51年10月19日～21日の両日に開催された九州地区国立大学教養部長会議（於・琉球大学）に正式議題として発議され、上記4大学のほか、鹿児島、琉球両大学も強い参加の希望を表明したので、これら2大学を加えて、参加大学を6大学とすること、及び今回の計画と実施には九州大学が当るなどの合意が成立、同時期に開催中であった6大学事務長会議にも報告し、了承された。
- (4) 各大学内でこの共同授業に対する態勢を整える必要上、昭和51年11月8日付で、九州大学武谷健二学長により、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、琉球の各大学長あてに、この共同授業に対する協力の依頼、及び計画の具体化に関する事務連絡は九州大学教養部長を中心とする各大学教養部長間で行うことが適切であると思われることなどの、二点を提案する書簡が送られた。また同日付を以て、武谷学長から奥田教養部長あてに、共同授業の今後の企画運営等につき依頼状が送られた。
- (5) この依頼をうけて奥田教養部長は昭和51年11月11日前記5大学教養部長あてに、共同授業の実実施計画試案を送付し、各大学派遣の講師名及びその講義テーマの回答を求めた。
- (6) 11月25日までに、各教養部長から参加する旨の回答が寄せられたが、琉球大学を除く各大学の場合、講師及びその講義テーマについては未定である旨の内容であった。九州大学教養部においては、この間11月17日の教授会に正式に提案され、「総合科目」として単位を認定することの可否については、本教養部内の総合科目委員会で検討し決定するとの合意を得ている。当委員会では、「2単位の認定には、計画案に予定されている授業時間数がやや不足しているのではないのかとの疑義が残るが、基本的には参加学生に総合科目として2単位を認定してよいであろう」との結論が得られた。

- (7) 九州大学のほか、佐賀・琉球の両大学では、総合科目として2単位を認定することとなった。しかし、長崎、熊本、鹿児島 の3つの大学では、学内的に機が熟してないとの理由などで、今回は単位認定は行わない旨の通知があった。
- また九州大学教養部内では、共同授業を本年度2回に分けて行うことは、事務取扱い上、難点があるとの意見があったので、3月中旬の1回だけに止めることで、関係各大学に通知し、了解をえることができた。
- (8) 九州大学は、以上のような経緯を経て共同授業実施具体案(要項案)を作成し、昭和51年12月25日付で、これを関係各大学に送付した。奥田教養部長は、単位認定を行いうるよう、この共同授業の形式をととのえるために、12月中旬文部省大学課と事務打合わせを行ったが、このことについては、上記具体案のなかに、備考として次のごとく付記してある。すなわち、「この共同授業は、形式上は当該大学の授業の一部として取扱われるものであるもので、単位認定等については、当該大学の教授会が自主的に判断することになる。したがって単位認定のためには、参加大学は最低一名の講師をこの共同授業に参加させなければならない」というのがその内容である。
- (9) 昭和52年1月27日～28日の両日、九州大学教養部の因幡庶務掛長と松崎教務掛長は、島原市に出張し、共同研修センター及び市内の状況を下見して、日程消化上の留意点などをチェックした。
- (10) 昭和52年2月1日、奥田教養部長名で関係各大学教養部長あてに、実施要項とともに、受講学生募集の開始、参加学生名簿の作成、引率責任教官(又は事務官)1名及び参加教職員氏名並びにその滞在予定(なお教官は全日程に参加することを原則としている)につき、2月25日までに返答するよう、依頼状を発送した。
- (11) 九州大学では、実施要項案の作成及び共同授業の企画・実施に際しては、学生たちのニーズとプログラムとの適合性を高め、本共同授業の運営と成果をよりよいものとするため、講義担当の講師以外に、とくに学生指導担当として、安藤廷男教授の参画を求めた。

2. 九州地区国立大学間合宿共同授業への各大学参加の経緯

昭和51年 9月・・・文部省・学長レベルの意向で「九州地区共同授業」の試みにつき、九州大学教養部長に検討依頼。

昭和51年10月・・・「九州地区大学一般教育研究会」に於いて、九州大学教養部長から佐賀・長崎・熊本大学教養部長に打診し、共同授業実施を4大学で申し合わせた。

昭和51年10月・・・「九州地区国立大学教養部長会議」に発議。
佐賀・長崎・熊本・九州大学のほか鹿児島・琉球大学も参加を希望し、参加大学6大学とした。

昭和53年 5月・・・九州大学学生部長名で、宮崎・大分・九州芸術工科・宮崎医科大学へ参加意向の照会を行う。

宮崎大学	参加申し込み
大分大学	参加申し込み
九州芸術工科大学	参加申し込み
宮崎医科大学	参加申し込み

昭和53年12月・・・九州大学学生部長名で大分医科・佐賀医科・福岡教育・九州工業大学へ参加意向の照会を行う。

福岡教育大学	参加申し込み
佐賀医科大学	参加申し込み
(その後、現在の開催日では参加不可能の連絡あり)	
九州工業大学	55年度以降の参加申し込み
大分医科大学	参加希望なし

平成 2年12月・・・九州大学教養部長名で鹿屋体育大学へ参加意向の照会を行う。

鹿屋体育大学	参加申し込み
--------	--------

平成 4年 3月・・・宮崎医科大学から参加不可能の連絡あり

3. 九州地区国立大学間合宿共同授業参加大学一覧

◎印は当番大学，○印は参加大学，△印は教職員のみ参加大学

大学名	年度	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
	回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
九州大学	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
熊本大学	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○
琉球大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○
佐賀大学	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○
長崎大学	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎
鹿児島大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	○
大分大学			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宮崎大学			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宮崎医科大学			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
九州芸術工科大学			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福岡教育大学				○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	×	△	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
九州工業大学					○	○	△	○	○	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○
鹿屋体育大学																	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		6	6	10	11	12	12	11	12	11	11	12	12	11	10	11	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12

参考：当番大学の九州大学から鹿児島大学までの6大学の順番は、「教養部長会議」の当番大学順で編成している。
 なお、現在「教養部長会議」は「教養教育実施組織代表者会議」となっている。

4. 九州地区国立大学間合宿共同授業の実施概要（第1回～第25回）

（注1）主管校は第1回から全て九州大学

（注2）参加人員の（ ）は教職員の内数

第1回 メインテーマ 『戦後世界における日本』
 開催期間 昭和52年 3月 9日（水）～12日（土） 3泊4日
 開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター（当番校：九州大学）
 参加人員 九州37（9），佐賀15（2），長崎6（3），
 熊本16（1），鹿児島15（2），琉球14（2）
 合計 6大学 103（19）

第2回 メインテーマ 『現代の人と自然』
 開催期間 昭和52年 7月11日（月）～15日（金） 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
 参加人員 九州34（12），佐賀16（2），長崎10（2），
 熊本13（2），鹿児島16（2），琉球18（3）
 合計 6大学 107（23）

第3回 メインテーマ 『現代の人と自然』
 開催期間 昭和53年 7月11日（火）～15日（土） 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
 参加人員 九州27（6），芸工大5（1），佐賀17（2），
 長崎12（2），熊本16（3），大分6（1），
 宮崎6（1），宮崎医4（1），鹿児島17（2），
 琉球17（2）
 合計 10大学 127（21）

第4回 メインテーマ 『現代の人と自然』
 開催期間 昭和54年 7月12日（木）～16日（月） 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
 社会福祉法人朝日高原福祉センター（当番校：熊本大学）
 参加人員 福岡教7（1），九州43（8），芸工大8（1），
 佐賀23（3），長崎18（2），熊本33（13），
 大分12（3），宮崎5（2），宮崎医5（1），
 鹿児島17（4），琉球26（2）
 合計 11大学 197（40）

第5回 メインテーマ 『現代社会の諸問題』
 開催期間 昭和55年 7月11日（金）～15日（火） 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
 社会福祉法人朝日高原福祉センター（当番校：熊本大学）
 参加人員 福岡教2（1），九州48（9），芸工大6（1），
 九州工3（2），佐賀22（3），長崎9（3），
 熊本35（13），大分11（2），宮崎5（2），
 宮崎医5（1），鹿児島19（3），琉球26（2）
 合計 12大学 191（42）

第6回 メインテーマ 『現代社会の諸問題』
 開催期間 昭和56年 7月11日(土)～15日(水) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)
 国民宿舎(ユースホステル)青雲荘(当番校:九州大学)
 参加人員 福岡教 3(1),九州53(9),芸工大 7(1),
 九州工 2(1),佐賀25(4),長崎21(7),
 熊本10(3),大分11(2),宮崎 7(2),
 宮崎医 3(2),鹿児島19(3),琉球35(2)
 合計 12大学 196(37)

第7回 メインテーマ 『コミュニケーション』
 開催期間 昭和57年 7月12日(月)～16日(金) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)
 参加人員 九州60(11),芸工大11(1),九州工 1(1),
 佐賀32(3),長崎14(8),熊本12(2),
 大分10(2),宮崎 5(1),宮崎医 6(1),
 鹿児島18(3),琉球31(2)
 合計 11大学 200(35)

第8回 メインテーマ 『男と女』
 開催期間 昭和58年 7月16日(土)～20日(水) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
 参加人員 福岡教 2(0),九州47(11),芸工大21(2),
 九州工 1(0),佐賀36(13),長崎 7(2),
 熊本11(1),大分 9(2),宮崎 4(1),
 宮崎医 6(1),鹿児島19(4),琉球34(4)
 合計 12大学 197(41)

第9回 メインテーマ 『世界の中の日本』
 開催期間 九重分校:昭和59年 7月14日(土)～18日(水) 4泊5日
 島原分校:昭和59年 7月11日(水)～15日(日) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
 参加人員 九州55(12),芸工大15(2),九州工 2(1),
 佐賀39(12),長崎 3(1),熊本10(2),
 大分11(2),宮崎 2(1),宮崎医 5(1),
 鹿児島19(4),琉球34(4)
 合計 11大学 195(42)

第10回 メインテーマ 『世界の中の日本 -世紀末から21世紀へ-』
 フォーラムテーマ 『日本の100年 -21世紀への展望-』
 開催期間 昭和60年 7月12日(金)～16日(火) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:鹿児島大学)
 参加人員 九州47(10),芸工大12(1),九州工 3(1),
 佐賀23(4),長崎 4(1),熊本13(2),
 大分14(2),宮崎 4(1),宮崎医 4(2),
 鹿児島43(13),琉球36(6)
 合計 11大学 203(43)

第11回 メインテーマ 『地域の視点から』
 フォーラムテーマ 『地域の可能性を求めて - 沖縄の視点から -』
 開催期間 昭和61年 7月16日(水)～21日(月) 5泊6日
 開催場所 国立沖縄青年の家(当番校:琉球大学)
 参加人員 福岡教 7(2), 九州37(7), 芸工大11(1),
 九州工 3(1), 佐賀33(4), 長崎13(2),
 熊本17(2), 大分13(2), 宮崎 6(1),
 宮崎医 3(1), 鹿児島27(3), 琉球105(31)
 合計 12大学 275(57)

第12回 メインテーマ 『地域からの視点』
 フォーラムテーマ 『九州とアジア』
 開催期間 昭和62年 7月11日(土)～15日(水) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
 参加人員 福岡教 8(1), 九州25(10), 芸工大 6(1),
 九州工 3(1), 佐賀12(2), 長崎 7(2),
 熊本14(4), 大分 7(1), 宮崎 7(1),
 宮崎医 2(2), 鹿児島11(2), 琉球17(2)
 合計 12大学 119(29)

第13回 メインテーマ 『地域を視つめて』
 フォーラムテーマ 『日本の中の九州』
 開催期間 昭和63年 7月14日(木)～18日(月) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
 参加人員 福岡教 4(0), 九州20(4), 芸工大 6(1),
 九州工 1(1), 佐賀10(1), 長崎11(2),
 熊本24(13), 大分10(2), 宮崎 6(0),
 鹿児島12(2), 琉球17(2)
 合計 11大学 121(28)

第14回 メインテーマ 『国際化を考える』
 フォーラムテーマ 『異文化接触の中で』
 開催期間 平成元年 7月12日(水)～16日(日) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)
 参加人員 九州20(5), 芸工大 6(1), 九州工 1(1),
 佐賀15(5), 長崎11(2), 熊本13(3),
 大分10(1), 宮崎10(2), 鹿児島12(2),
 琉球30(14)
 合計 10大学 128(36)

第15回 メインテーマ 『生活と科学』
 フォーラムテーマ 『現代社会に生きる』
 開催期間 平成2年 7月12日(木)～16日(月) 4泊5日
 開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:佐賀大学)
 参加人員 福岡教 2(2), 九州20(5), 芸工大 6(1),
 九州工 3(1), 佐賀28(19), 長崎14(4),
 熊本12(2), 大分 9(1), 宮崎 9(2),
 鹿児島11(2), 琉球17(2)
 合計 11大学 131(41)

- 第21回 メインテーマ 『科学と人間　－混沌の時代をいかに生きるか－』
フォーラムテーマ 『大学で何をするか』
開催期間 平成 8年 7月11日(木)～15日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:長崎大学)
参加人員 福岡教 6(1),九州19(7),芸工大 5(1),
九州工 5(1),佐賀 9(2),長崎23(13),
熊本12(3),大分 8(2),宮崎 3(2),
鹿児島12(5),鹿屋体 5(2),琉球14(2)
合 計 12大学 121(41)
- 第22回 メインテーマ 『共生の時代の科学・学問　－いま,大学で何を学か－』
フォーラムテーマ 『それぞれの学びと生き方－学生時代をどうすごすか－』
開催期間 平成 9年 7月11日(金)～15日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:鹿児島大学)
参加人員 福岡教 6(1),九州20(8),芸工大 6(1),
九州工 6(1),佐賀12(2),長崎12(2),
熊本15(5),大分 8(2),宮崎 8(2),
鹿児島24(14),鹿屋体 6(2),琉球14(2)
合 計 12大学 137(42)
- 第23回 メインテーマ 『現代の科学・学問と21世紀への展望
－過去・現在・未来－』
フォーラムテーマ 『これからの大学:授業・カリキュラム,
課外活動,学生生活』
開催期間 平成10年 7月16日(木)～20日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
参加人員 福岡教 6(1),九州18(6),芸工大 7(2),
九州工 7(2),佐賀14(4),長崎12(2),
熊本26(16),大分 8(2),宮崎 8(2),
鹿児島12(2),鹿屋体 6(2),琉球15(3)
合 計 12大学 139(44)
- 第24回 メインテーマ 『人間と環境－よりよい関係を求めて－』
フォーラムテーマ 『人間と環境－いま,私たちに何ができるか－』
開催期間 平成11年 7月16日(金)～20日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:佐賀大学)
参加人員 福岡教 7(2),九州17(7),芸工大 6(2),
九州工 6(1),佐賀25(13),長崎12(2),
熊本12(2),大分 8(2),宮崎 6(2),
鹿児島13(3),鹿屋体 6(2),琉球17(5),
合 計 12大学 135(43)
- 第25回 メインテーマ 『人間の安全保障と平和　－20世紀から21世紀へ』
フォーラムテーマ 『人間の安全保障と平和　－21世紀に何をなすべきか』
開催期間 平成12年 8月日(金)～日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)
参加人員 福岡教 7(2),九州17(7),芸工大 6(2),
九州工 6(1),佐賀25(13),長崎12(2),
熊本12(2),大分 8(2),宮崎 6(2),
鹿児島13(3),鹿屋体 6(2),琉球17(5),
合 計 12大学 135(43)

5. 九州地区国立大学間合宿共同授業参加費の推移

第 1 回	2, 5 5 0 円 (3 泊 4 日)	島原共同研修センター
第 2 回	3, 4 4 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 3 回	4, 8 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 4 回	5, 4 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 朝日高原福祉センター
第 5 回	6, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 朝日高原福祉センター
第 6 回	7, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	国民宿舎「青雲荘」, 島原共同研修センター
第 7 回	7, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 島原共同研修センター
第 8 回	8, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 島原共同研修センター
第 9 回	8, 5 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 島原共同研修センター
第 1 0 回	8, 5 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所, 島原共同研修センター
第 1 1 回	1 3, 0 0 0 円 (5 泊 6 日)	国立「沖縄青年の家」
第 1 2 回	8, 5 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 3 回	8, 5 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 4 回	9, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 5 回	9, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 6 回	9, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 7 回	9, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 8 回	1 0, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 1 9 回	1 0, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 0 回	1 0, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 1 回	1 0, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 2 回	1 2, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 3 回	1 2, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 4 回	1 2, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 5 回	1 2, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所
第 2 6 回	1 2, 0 0 0 円 (4 泊 5 日)	九重共同研修所

〈備考〉実施会場の正式名称

九重共同研修所：九州地区国立大学九重共同研修所

(研修所に加えて、九州大学「山の家」も利用している。)

島原共同研修センター：九州地区国立大学島原共同研修センター

朝日高原福祉センター：社会福祉法人「朝日高原福祉センター」

国民宿舎「青雲荘」：国民宿舎(ユースホステル)「青雲荘」

6. 第26回九州地区国立大学間合宿共同授業の事務日程

平成12年	11月15日	九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議
	11月20日	企画委員会開催通知（主管校から各大学へ）
	12月12日	企画委員会（於：九州大学）
	12月25日	講義題目等の推薦依頼（主管校から各大学へ）
平成13年	1月11日	『平成13年度教養特別講義プログラム推進経費に係る要求書』の提出依頼（主管校から各大学へ）
	1月19日	『平成13年度教養特別講義プログラム推進経費に係る要求書』の提出締切（各大学から主管校へ）
	2月5日	SCSを使った第26回九州地区国立大学間合宿共同授業打合会開催通知（主管校から各大学へ）
	2月16日	講義題目等の推薦締切（各大学から主管校へ）
	2月下旬	講義題目等の調整・決定（当番大学）
	2月下旬	『平成13年度教養特別講義プログラム推進経費要求書』の提出（主管校から文部省へ）
	4月47日	実施委員会開催通知（主管校から各大学へ）
	4月上旬	「講義要旨」及び「参考図書」の提出締切（各大学から当番大学へ）
	4月14日	実施委員会（於：九州大学）
	5月2日	実施通知（学生募集等）， 「参加学生名簿」及び「教職員滞在計画表」提出依頼（主管校から各大学へ）
	5月30日	SCSを使った第26回九州地区国立大学間合宿共同授業打合会
	5月31日	「参加学生名簿」及び「教職員滞在計画表」提出締切（各大学から当番大学へ）
	6月上旬	参加人員の調整（当番大学）
	7月10日	レジュメ送付（当番大学から各大学へ）
	8月24日～28日	合宿共同授業の実施（於：九重共同研修所）
	9月18日	報告書原稿の依頼（主管校から参加教職員へ）
	10月9日	報告書原稿の提出締切